



小説  
六部  
泉 翠



始





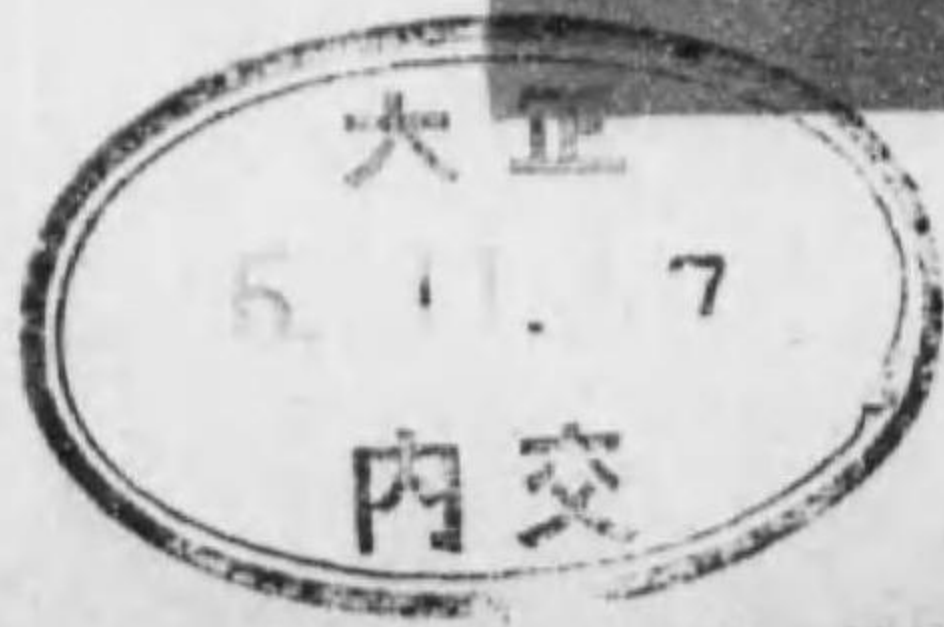




4号115  
108

木保札菽

表野翠泉若





大正五年十月

森野翠泉識



人生の儂ないのを、歎いて、咒いて呉れと云ふのちやあ  
無い。儂ないのを悲歎するのは、其意志が弱いからだ。人  
生を説いて、苦、悲、哀、情を表はさうとした筆の跡を讀  
むで、一滴の涙をそゝいで貰ひ度い。そして、儂なくてふ  
總てが。靈肉の厚い力の裡に在るのを、知られ度いのだ。  
事實を携へて、之れを筆にした著者は。一篇の告白とも  
思つて居る。そして、靈肉によりて購はれた。尊い犠牲を  
知つて。社會へ著述するのである。

大正五年十月、秋雨の二階で

森野翠泉識す





扶 ね ほ こ





小鏡

萩れぼこ

處世一 可愛がつてね

森野翠泉著

淡い日の光線が、燻むだやうな灰色の天空から、僅に、澱濁た荒川の瀬面へ投げ  
て、尾久の渡舟場を往來する渡舟は、道路ゆく男女等の下駄の泥に汚れ、押す櫓に  
未だ解けぬ霜が、寒氣に、白い粉を凍らせて居る。

吹き荒むだ。木枯風の後の葉の無い古銀杏や榎などの枝梢が、骨ばかりなる破れ



團扇を立てたかのやうに、冬の気分が、干からびた茅葺家根の農家から、田島畑へ漾うて、来る春季を待ち憧れるか、糶糊した夢の覺た後の痛傷しい光景をして居る。瘦枯れた對岸は、王子邊りの工場から吐く煤煙に覆れて、生氣の無い色彩が、肌へ生活てふ或る暗示を與へて、思はず戰慄を禁じられ無い、悲哀の想ひを運ぶ堤一帶へ、筑波風しが、颯と吹きつける。

下駄に、踏み消された霜の跡が、渡舟場の棧橋を濡らして、夜の寒さを偲ばせる上をシヨルに襟深く包卷み、紋羽二重縮緬とか云ふ道行の下から、お召へ米流の重着をした裾が亂れて、龍を繪書いた長襦袢がこぼれる。丸髻の生々しく、刷つと白粉化粧した香が、潑と睜つた眼へ浮て、濃艶な盪乎とした姿を斜めに、人待つ態らしく佇立むだ。二十三歳に成る繁子は、霜解の路に刎上がつた、駒下駄の泥を氣にして、昵乎、對岸を出る渡舟の上を眺めて、莞爾双頬へ笑ひを浮せると、水際近い棧橋へ出て、袖のあたりを戯つて居る。

「やあ、待たせたね、」

飛能乎、棧橋へ移つた工學士の大葉幸彦は、迎へる繁子に斯う言ひ乍ら、づんづん先へ歩き出す。

「貴郎、貴郎や、妾待つてたわよ、長時間待つてたのよ、あら……厭……先へ往ちやつて……」

「ハツハツ、悪かつたね、さあ早くお出で……」

喫いかけた。紙巻煙草を投げ棄て、後振り願つた幸彦は「鯉御料理」と書表れた。門を仰いで、寄り添ふ繁子に、何やら囁やく、

「……爾う、宜いてせう。けど未だ十一時よ……」

時計を、帯の間から出して、指針を眺めた繁子は、バチリと云ふ音をさせて、幸彦の後から、川岸へ對した座敷へ通ほる。

「お、寒かつた。」



「爾うてせう。妾も棧橋で待つて居た時は、寒くつて寒くつて、早く貴郎が来れば……と、妾そればかり思つて、震へかゝる體を、凝耐して居たの……」

「爾うか、そりや寒かつたらう。早く戻らうと思つたがね、絶ず變る氣流を調べるのだもの、それに此所は激變だつたからね、遂に遅く成つちやつたよ。だから来るなと言つたんだのに、他へても遊びに行くと思つて、直ぐ病的に成るから困るよ、」

「濟ません、」

女中が運むだ。鯉の洗へ直ぐ箸を入れた幸彦へ、酌をした繁子は、苦さうに飲むのを見て、銚子の冷たのてはと、障つて見る。

「貴郎、何を考へて在らつしやるの、又御研究の……妾心配だわ、少しはお休みなさいな、爾うて無いと、お體を悪してしまわ、ねえ貴郎、今日は妾のものになつて、お話しませうよ、てないと妾も病氣に成つちまわ、ねえつたら……あ、怎麼せ爾うてせうよ、妾見度な女と一緒に來たものだから、お酒が甘味無いのでせう

よ、濟ませんでした、」

手を、銚子から放して、袖を眼の縁へつけると、何時か涙がホロ／＼と流れる。眉を寄せた幸彦は、ブツと吹き出し笑ひをして、

「フツフツハツハツ、冗談ぢや無い、僕が何か考へ出すと、直ぐ涙を出してさ、お前の病氣にも困るよ、」

「怎麼せ病氣ですよ、研究だ／＼だつて、家に居るのは夜ばかりで、朝起きると、直ぐお出かけに成つてさ、芝浦の工場へ行くなんて、虚偽の皮も可い加減になさい先の奥様の子供の處へ行つてさ、え、口惜いッ……、」

前の酒盃を放りかゝる。

「ば莫迦ッ、何をするんだ、」

「え、莫迦ですよ、莫迦で濟ません、莫迦だから斯う遣つて従いて來たんですよ、眞面目らしく研究の振りを見せてさ、妾を棧橋へ置いて、寒い思ひをするのも宜う



御座いますが、今日に限つて、氣流の變化も無いものだ。邪魔ですものね、斯う云ふ思ひさせりや、もう之れから疑ふまいと思つて、怎麼爾うてせうよ、濟ませんてしたね、お邪魔して、もう之れからお供はしませんから、御安心なさい……、」

「繁ッ、之れ繁子、な何を勝手な言ばかり云ふのだ。僕がなんて先の家内の處へ行ふ、莫迦も休みく云いなさい、そりや道順で、遂ひ行くとも無く、四年振りて逢ひに行つたさ、それも、清子の處へ行つたのぢや無いよ、子供が……、」

「それ御覽なさい、」

「まあ黙言たら宜い、親として傍へ置けない僕しの心中……ぢや無い、意氣地の無いのを考へるとね、情として、若しや……とも思はない事も無いからね、それで行つて見たのさ、お前にや濟なかつたが、何も隠れて行つたのぢや無し、それを兎や角云ふにはあたら無いぢや無いか、」

「ですからさ、何も言やしませんよ、」

「それぢや黙言つてお在て、何も、一時的熱した戀と愛とに支配されて、泣いて別れた時の憂苦を忘れ、可愛の子を手放してしまふやうな、彼女お清に、何て逢い度からう。又逢い度くも無いだらう、里子へやられて、ひとり世を渡らうとするのを考へると、年齢を増るに従ひ、同じやうに手放した僕は、遂ひ子供……をね、それもお前に産ないからだと、僕は怨むあまりだよ、ね、だから早く産てくれ、」

「だつて、其りや無理よ、」

「無理ぢや無い、僕の總ての愛を、お前の前へ投げ與へて居るのぢや無いか、産ないのは、お前の熱した情が無いからだ。要り愛が無いからだ、」

「でも體が……、」

「體の病ひのもの、夫を思は無いからだ、」

「無理だわ、病く仕様として、病く成つたのぢや無し、種々心配があるものだからよ。研究だ……だつて、機械の事ばつか仕て……そりや機械の御研究も大事でせう



が、ホ、妾……」

「ハイ、解りましたから、成るだけ精神病を起ら無いやうにね、そして僕の事業の防害をしないやうに、可愛がつて貰ひ度いと思つたら、樂に研究させてお呉れ成功するのも、國家社會の爲めだからね、僕を、それだけに思ふなら、國家社會を想つてだ、い少し頭腦を樂になさい、」

「え、妾、什麼苦勞でもするわ、けど、貴郎がお可愛想てね、心配だわ、勘忍してね……」

「ハツハツ、其氣で病的になら無いやうにね、否、慰安者のお前が、僕の事業に對する愛の神だ。頼みにする妻だからね、確りして居て呉れんでは、僕が困るよ。折角の事業も、それが爲め、途中挫折せにや成らんよ、」

「大丈夫だわ、けど、妾のお父様が、生糸で失敗してから、母様とは別れるし、自暴に成つて居ますから、貴君にばつか心配かけるのですもの、それに、大嫌な、彼

の溝口が、お父様の失敗の弱點を握つて、何か仕様として居るのらしいのよ、まさか妾を離別させて、女房にしようとは思ひますまいが、貴郎と夫婦に成る前は、そりや酷かつたわ……」

「……………」

「御存じの通り、失敗して、狂ひ見度に成つたお父様を、そりや見て居られ無いやうに、大事にしましてね、氣味の悪いやうだつたわ、けれど、妾と云ふ心は、もう貴郎の處に在るのですもの、大越の裁縫部の往來に、必度彼の駿河臺で逢ふのでせう。彼の溝口にね、藝術家の權威者だつてやうに、長い髪の毛をして、荒い縞の着衣着た處は、兩國の角力の取の見度だつたわ、ホ、ホ、そして厭嫌らしい眼つきをしちや、女房になつてくれつて云ふのでせう、妾弱つちやたわ、父も云ふのですもの……けれど、貴郎の愛と、妾の戀とが………………。望み通りなんてせう、ホホ、妾……嬉しいのよ、何故子供が出来無いのでせう、」



「ハツハツ、まあ良いさ、お前の病氣さへ癒れば、怎麼事があらうと、心配なんかするものか、だからね、實家の心配や、周囲の苦勞、家庭の生活難、僕に對する思想なんか忘れて、夫婦が一個で在つて、一個のものが、兩手に依る事をせにや成らんと、思つて居て呉れなければ困るよ。」

「何ですか、不明瞭せんが、大丈夫よ、もう世話焼かせやしませんわ、」

「うむ、其變り、體を大事にしてね、餘り感情に走らん様にしておくれ、頼むよ。」

「えい、」

莞爾して、冷ては居たが銚子の酒を、幸彦の酒盃へ酌をして、金齒を見せながら嬉しげに笑ふ、

實業家の次男として産れた。大葉幸彦は、實家に巨萬の資産を有して居るが、それは親と長兄の物で、親に依つて工科大学を卒業れた以上は、腕の期する處と相まつて、事業の成功を、國家社會へ呈するのが人と生れた職であると、苦熱と闘ひつ

つ、研究物に對して、腐心して居るのだ。それも、遂ひ二三年前から、學校卒業ては話外の懶怠者で、親兄弟親類からは、相手にされなかつた。否、現在でも爾う云ふ惰落ものとして、警戒されて居る幸彦は、此繁子と夫婦に成つて、繁子の女であり乍ら、苦學力行して中等教員の免狀を得た、行爲を知つて、悔ひ改めたのは、國家へ對する可く、或る研究に従事仕始めたのだ。

「繁子、少し暖かく成つたやうだね、」

言ひ合さねど、窓越に、渡舟の往來を眺めて、微笑んだ夫婦は、坐り直して、障子に寫る影に眼を睜つた。

同 二 手荒な事を

街路凍る、歳暮の夜更を破つて、甚しく門を叩く音を耳にして。夜毎に、徹夜す



研究室の幸彦は、遇乎、研究中の發動機の組み立てを中止して、齒車を下へ置き、耳を疑ふやうにそばだて、

「自家かしら……うむ、自家だぞ……」

自家とすれば、深夜の訪音……實家の父が……兄弟妹の誰れか……親類でまさか……電報に相違あるまい、それとも近火の爲め……などか知らと、もの態様の想ひを畫いて、慌たしく玄關へ出る。

誰人ですか、暫時お待ち下さい、今開ますから……」

俄多騒然と、格子を開け、戸へ手を繰りながら、一間ばかり敷れた石を傳うて、門の門を放し、扉を開いて、電燈に隙し乍ら、街路の訪人を覗くと、愕乎として扉へ手をかけた。

「うい、あゝ寒かつた。大層永く待たせるね、怎麼も濟なかつたよ。ゲウイツ、また今夜も御厄介だよ。ハツハツ、何夜もと違つて、今夜は大變遅く成つちやつて

ね、彼の奥様は寝たかい、奥様俺の娘でね、此様家へなんか嫁るつもりぢや……ハツハツ、やあ什麼も、其の御無沙汰致しやしたよ、實は、例の女中と思ひやしてね、ハツハツ、

「之れは、繁子のお父様ですか、何か急な用でも……」

「否、それが其の何でね、うい、げッ、あゝ、酔つちやつてね、濟ませんよ、ど怎麼も今晚は……へッ、」

「あッ、危ないですよ、」

義父の體を押へた幸彦は、眉を寄せて、研究機の總てが破壊されたかのやうに、厭な思ひを抱いた。

「やあ什麼も、はゞかりさまです。な何、大丈夫ですよ。酒は飲むても飲まいても心まで酔されせんからね、おツと之れは、ハツハツ、貴方の御馳走にや成りやせんからね、御心配御無用でげすよ、」



「けれど、お危ないからです、」  
 「まあ宜う御座すつたら、お放し下さい、何は怎麼しました。お繁の女は、何故起き無えのです。それとも實家でもお遣りに成りましたかな、えッうゝい、」  
 「繁ですか、繁は例の病氣で、寝て居ますよ。殆然狂ひのやうです。可哀想に、苦學の傍親を養い、噂と息を吐いて、勤人に成れば、其人格や品性を傷つけやうとする。獸のやうな親の爲めに、狂的病になつちやつて居ますよ、僕が以前のやうな放蕩懶惰で在つたなら、之れでも對社會は知つてゐるから、打ち殺して遣つたかも知解ら無い、社會の爲めてすからね、けれど、多少教育も受け、人の道の踏む可きを知つた僕は、その出來ないのを、不幸だと思つてる、」  
 「あつあア、眠い、うゝい、宜い氣持ちに酔つばらつちやつた。どれ御厄介に成りやせうか、」

酒臭い息を吐ながら、蹣跚する義父の危い體を押へて、顔を横向た幸彦は、耐ら

ないと云ふ態度で、

「あッ、危ない……若し義父様、誠に恐れ入りますが、今夜は戻つて貰ひ度いです少し調べものも有り。繁子も病氣で臥つて居りますし、生憎女中も暇間を遣りましたから、お世話する事が出来ません何卒か、今夜だけは、失禮ですが、お歸り下さい、折角お出て下さつたのに……、」

「えッ、歸れ、おやゝ、妙な風に成りやしたね、俺や貴方さんに用が無えので、彼女たあ俺あ知ら無えよ、大事の娘のお繁に、用が、ウゝイツ、あるから来たんだげいッ、あゝ酔つた。酔つたつて大きにお世話だ。何てえ、態ア見やがれ、親不孝め、さあ娘に逢さして呉ん無え、會さ無えのか、あゝ宜い氣持ちだ、へッ、お蔭様でね、な何がお蔭様でえ、さあ、矢でも鐵砲でも持つて來い、それに驚く萬兵衛様ぢや無えのだ。之れでも過去は……、」

「若し、困りますな、靜に仕て下さい、折角世間で御安眠に成つて居るのに、お



障げしますから、アツ、危ない、何處へ行くのです。那麼門なんか持つて、困るぢやありませんか、さあお放し下さい、」

「な何しやがるんだ、貴方が放し無え、榛だらうが、門だらうが、俺の事言かしやがる。世間の奴等を叩き殺すんだ。えいッ、放して呉ん無え、放せつたら、」

「いゝや放しません、さあ、世間へ御迷惑に成りますから……家内へお入り下さい、人騒せです……、」

「へつ、入れつてえなら、入つても遣るが、之れからも在るこつた。假令女房の憎い親でも、親なんだからね、注意ねえよ、學者にも似合無えなまあ御免なせい、どつこいしよと来た、」

門を締めて、吻つと歎息を吐き、厭な想ひをした幸彦は、又奥を覗いて、深く眉を寄せ、齒を噛み鳴らして、慌て玄關の戸を閉る。

「……やい、起ねえつたら、起ねえのか、一人つきや無え父親が、態々此夜更

に來たんぢや無えか、おやく、泣いて居やがるな、冗談ぢや無え、何が悲しいんで泣きやがるんだ。確りしろい、親父が從てるぜ。えつ、おいつ、怎麼したんだよ。」

「お父様……貴父は何と云ふ人なんてせうね、」

「な、何が怎麼したんでえ、」

「怎麼したんぢやありません、少しは身の周圍や、未來を考へて下さいな、妾が幸彦のに濟ないぢや有りませんか、彼、やつて、一生懸命に御研究になつて在つしやるのは、遊び事ぢや有りませんか、晝間は工場へ通ひ、職工のやうになつて働いて在つしやる上に、歸れば直ぐ御研究にかゝるのでせう。それも之れも、妾等夫婦が、未來の家を思ふからですよ、其中も構は無いて、お邪魔するなんて、お父様は鬼です、蛇です、」

「何が鬼でえ、へッ邪だつて云ふのか、やい、確りしろい、俺あ親だよ、親が娘の處に來るのに、何が邪魔でえ、えッ、不思議は有るめいぢやあ無えか、親に對や



あがつて、寝て居て戯言ぬかしやがる無え、誰人のお蔭で大きく成育やがつた、それも宜いが、幾干か俺の懐中の恥に成ら無えやうに成りや兎に角、此様貧乏人と勝手に夫婦に成りやがつて、親あ見棄る娘が、世の中に在るけえ、親不孝め、」

「そりやお父様不可せんよ、貴父は妾にかゝるのぢや無いてせう、萬太郎と云ふ、兄さんが居るぢやありませんか、其兄さんを、小さい時に……、」

「な何言しやがるんだ。」

「ぢや之れから柔順くなさいな、妾や伯母さんのお蔭で、貴父や、母様の傍に居られました、十四歳から交換局へ出勤、僅でも食るだけわ仕て居たりや有りませんか、せめて、他人の家に嫁たら、嫁た家へ、恥の成ら無いやうにするのが、娘に對する親の情でせう。そりや妾も悪る御座いましたさ、お父様の嫁と云ふ方へ嫁ないで、幸彦の處へ勝手に参りましたんてすもの、お詫の仕様も有りませんが、それにしても、親として、世間の前へだけでも、恥になら無いやうにするのが……、」

「やい、宜い加減にしる、何だつて、娘の恥に成らなけりや、親は恥かいても宜いのか、え、あいつ、」

「爾う云ふ譯ぢや有りませんが、幸彦のに濟ないぢや在りませんか、澤山の月給取りぢや無し、僅のお金から研究資を十分に遣へないが、毎月を楽しみに成さるのをチビく横取りするやうに、皆お酒になつちやふのすもの、ですからさ、少しは妾の身にだつて……ねえ、お父様……、」

「な何がお父様でえ、俺の嫁つてえ處へ行か無えて、勝手な家へ來やがつたから、俺も怒鳴り度か無え口を開けるんだ、さあ起きて、俺と一緒に歸んねえ、歸りやあ又その何だ、此度は支度金も充分に取り。恥か、せねえ様にするぜ。な、お父様にも恥か、せる事も無えからな、さあ歸てくれ、病氣だつて、直ぐ全快させて遣あな、」

「な何をお父様は云ふのです。女の道を破らせるのですか、假令我儘で幸彦のと夫婦になつても、それは神様が斯う成さつたので、女の操の大事なのを御試しなさッ



たのですよ、操を守れと云ふのなら、親として尊いお言葉ですが、親が生活しようとして、娘の操を破らせやうとするのが、親の娘に對する道でせうか、妾を産だのは妾で生る爲めなのですか、』

『な何を言しやがるんでえ。親なればこそ、娘の未來を思つて、貧乏人の處へ遣り度く無えし、困るのを見て居られ無えからだ。』

『それなら、お父様さへ無心なさらなきや、別に困りはしませんよ、よし困つて貧乏したからつて、それは夫婦の運賦なのでもの、それに、斯う貧乏したつて、皆悉研究なさる、幸彦の材料の資本ですもの、妾は喜んで、貧乏して居ますわ、永久に貧乏して居ても、愛の美しい、精神の誠さへあれば、眼の前の物質に慰められるやうな、底級虚榮……、』

『勝手に仕やがれ、親の前で惚氣やがつて、理由の不解可い誤澤並べやがる。だから汝が學校へ行きやがつたのを、俺あ感心仕無のだ。生絲の店が盛だつた時なら、』

俺だつて何も汝の處へ來や仕無や、學校へだつて満足に通せて遣らあ、それが出来なかつたものだから、勝手な事仕やがつて、此親を苦しめやがるんだな、さあ殺せ親を怨みやあがる成ら、一層の事殺してくんねえ、殺さねえのか、やい親殺しめ、殺せつたら、』

『あれツ、お父様、何を爲さるんです。』

寢て居る繁子の腕を掴んで、野心の破れた繁子の親の萬兵衛は、物をも言はず捻りかゝる腕を、左はさせじと、半ば起きあがつた繁子は、ホロ／＼涙を流しながら自棄に荒んだ情の親の心を哀れむやうに、泣き悲しむ。

『若しお父様、繁子は御覽の通り病氣ですから、悪い處は僕がお詫します。何卒手荒な事を成さら無いて下さい、あッ、危ない、繁子も爾うだ。何故お父様に反抗しなされるひだ、』

繁子の腕を掴んだ。萬兵衛の手を放させ、其間へ坐つた幸彦は、何か言はうとす



る繁子を叱り制す。

「へッへッ、こりや大將……ぢや無い、幸彦さんだつたね、否もう繁が世話焼せるんで、俺や困つてた處ですよ、へッへ、へッ、へッ、怎麼も……早や、」

「否、繁子が悪いのです。お前も爾うだ。假令體が悪いからつて、親、お父様のお出になつたら、何故起き無いのです。若しお父様。夜もたいふ更けますから、何の御用が在つてお出になつたか知れませんが、明日伺ふとして、私が彼方へ床を延升から、何卒お寢眠なすつて下さい、」

「へッへッ、何ね、用つて其何の事だが、左様ですかい、ぢや御免蒙むるとして、お繁つ、能くも親父に恥かかせやがつたな、親不孝めッ、」

『さあ、何卒……』

蹠跚足の危ない體を、幸彦は支へ抱へる様に、繁子の親の萬兵衛を、次室へ連れ出す後見送くつた繁子は、俄破と枕へ身を伏せて、丸鬚を震はし、ヨ、と泣き悶え

23  
る。それを顧みた幸彦は、更け去く夜の空を、閉めた縁の戸の欄間から仰いて、吻つと歎息を吐いた時、星が流れたか、閃光とした影が、戸の隙間から洩れて、寒さがひとききは肌沁む。

薄

霜

一 憂さを合むて

根津権現社の森は、未だ霜解せぬ春の日を仰いて、樹木の梢枝は、萌初めもせず東風寒く受けて、慄へて居る。

公園に成つた。境内の池の畔りて、甲を寒さうに干す龜を眺め乍ら、洋杖をついた。長髪の男が、蹲居て煙草を喫む秋田萬兵衛に對つて、囁くやうに、くどくど何やら言ふては、洋杖を振り廻して居る。

「ですからさ、貴方の御親切は知つて居りやすよ、けれど、夜路も唄とやらで、何



娘が右左言ふたからつて、親の権利で云ものにや勝てやせんや、まあ私にお任せ置きなせい、恰度娘の亭主野郎も、工場の方を辭職ちやいやしてね、何だか研究だつてね、海の中を歩く機械を發明してやすが、もうそろ／＼金の無え時分てげすからまあ御心配なせいますな、何程堅い女だからつて、食えず、着られずぢや惚れた男だつて、愛想が盡きやすからね、爾う急無えだつて、宜う御座えやすよ、親の私が從てまさあ……、』

『うむ、其りや安心して居るさ、併し、多少心配もするから、念も押理由さ、眞實に頼みますぜ、成功すりや豫ての通り。千や二千の金は、失禮だが融通しますよ。確りね、』

『へッへッ、鐵の脇刀だ。御心配なせいますな、時に何てげすか、へッへッ、少少願ひしてえので……、』

『さつ、願ひ……何の事だね、僕、我輩に出来ることなら、必度遣つて見せるが、』

まあ話たまへ、』

『へえ、爾りや出来ることで、例の金をね、實は娘の女の處も此頃は不漁でね、へッへッ、弱つて居る處なんて、貴方の處へ、大事な娘を嫁んでげすもの、へッへッ少し位の金なんかね、』

ボンと、石を池へ投げ込んで、波紋の亂れる態を眺めながら、チロリと長髪の男を仰いて見る。

『……金かね、困つたな、成功の上なら、何圓でもお頼みが無くつたつて聞くが、今の處ではね……、』

『へえ、出来やせんので……、』

『まあ、出来ないね、』

『へえ、爾うですかい、出来なけりや夫れまでとげすがね、之れが何も再三と云のぢや無し、始めてお頼みしやすのですからね、へッへッ、少しは……、』



「若し、萬兵衛さん、爾りや聞いて上げ度いが、今持つて居る金は、其の他人の預りてね、弱つたな、」

「爾うでげしせう。無理も有りやせん、何、今日に限つたのぢや無え、何日だつてね、私が頼むで、一つだつて未だ借りた覺えも無さや、貸した試も無えので、どれ出懸けようとしやせうか、」

裾を拂叩いて、角帯を堅く結び直し、薄ら笑ひを頬へ浮せて、下駄を履換へながら腰を軽く下げる。

「あや、萬兵衛さん、感情害しちや困る、僕も溝口助藏だ、何も遣らない、否、お貸せんと云ふのぢや無い、必度其融通するが、何しても成功の上でね……、」

「へい、ですから、其節は宜しくお願ひするとして、今日は之れて失禮致しやす、てはまた……、」

「夫れぢや困る、」

「何がお困りです。別に私だ歸るのに、お困りになる筈がありやすまい、ねえ、爾うぢやありやせんか、魚だつて、水が無さや住みやせんからね、」

「夫りや言ふ迄も無いが、弱つたな、」

「何も、お弱りになる事は有りますまい、」

「うむ、諾し、お貸し仕様、だが、返して呉れなさや困るからね、一體何程なんてす、澤山ぢや……、」

「後に、義親になる私に、貸せなんて、那麼水臭い金なら、何も骨折つてお頼みはしやせんからね、」

「ひ、夫りや其通りだ、成る程、宜し、貸そう、否、失禮だが、差し上げやう、て何程です、」

「へい、爾う事が解りやへッへ、へッ、何ね、少し有りや顔が立つんで、十圓ばかりね、貴方の事ですもの、十圓ぐらゐ、鼻紙のやうなもので、」



「うむ、む、夫りや困つたな、生憎此所に、十圓なんて、否、眞の小出しの金だけで……、」

「爾うですかい、ぢや困つたな、五圓位は……、」

「お氣の毒だな、」

「無いので、成る程ね、其いつは弱つた、けど何てげえせう、他人様のお預りしたとか云ふ……、」

「莫迦云つちや不可、他人の金に手がつけられるものか、他人の金なら、五百圓ばかりあるが……、」

「其れない宜いぢや有りやせんか、自宅へお歸りに成りや、十や二十の金なんか、何日でも有るんぢや有りやせんか、ねえ、濟ませんが、お預りの中からでも、其の何で、是非ね、頼みやすよ、」

「之りや困る……、」

「怎麼してもですかへ、爾うてげすか、ぢやもうお頼みしやすまい、まあ御緩り……其中……、」

「困つたな、」

「何もお困りは無いてせう。困るのは私ばかりで……、」

「だからです。僕が困るのです、」

「へッへッ、お口だけは、何、婿舅となる仲で居ながら、義親の困るのをね、……爾うてせう、」

「ぢや話ませう。實は、預つて、持つて居る筈が、家へ置いて來たんでね、此所に持つてるのは、壹圓内外でね、それも、原稿紙を買はにや成らん金で、新聞社の方から、音楽に關する事を頼まれたので、ビヤニストたる。此溝口助藏の音楽革正について大論文を草する爲めなのだから、之れが社界へ出れば取りも直さず、就中、親たる貴方の爲めですからな、其處を一つ、何してくれませんか、」



「へえ、ビヤベストを拳骨で破裂んてげすかい、成る程貴方の體ぢや、ビールの中のベストだつて、驚いてしまふてせうね、けれど、其れが手品の破裂た處で、今の私にや何も成りやせんからね、怎麼てげせう、斯うしちやあ……何うせ遊んでるのだから……、」

「何をするんです、」

「貴方のお宅まで参りやせう。ね、爾うして拜借して歸りませう。お貸し下ださりや、北海道の端までもお供しやすぜ、ハツハツハツ、ね、頼みやすよ、」

「それがね……困つたな、」

「へえ、何故ね、自宅に……、」

「もう無いからね、それで實は困つてるんで……、」

「へえ、爾うてげすかい、何だ莫迦くしい、ぢや其處にお在なさるだけで……へえ、宜うがす。ぢや夫れだけ貰つて去きませう。後は此次ぎとして、」

「爾うですか、氣の毒だな、ぢや八十錢だけあげとさせませう。皆上げ度いが、生活にも否その何で……、」

「へえ、八十錢……仕方が有りやせん、」

溝口が、不承不承に墓口から惜しさうに掘り出すのを、致方が無いと云ふやうな顔して、受け取つた萬兵衛は、不圖山門の邊りを眺めて、莞爾笑ながら、

「噂すりや蔭で、繁が來ましたよ、娘が……、」

「えつ、彼の繁子さんが……うむ、成る程……、」

銀杏返しに結つた頭髪の、鬚の邊が亂だれて、薄く化粧した顔の頬が瘦れ、憂ひを含むだ眉毛が、總てを淋しく調和させて、お召の荒い燻んだ縞の書生羽織に、銘仙の裕衣を着て、廣く襦袢の襟を出し、俯瞰がちに、敷石を踏んで、裏門へ急ぐ繁子は、池の畔に、親の萬兵衛と、溝口とが居るとは知ら無い、

「あゝ、繁ぢや無いか、何處へ行くんだ、」



「おや、お父様なの、まあ、貴父こそ何方へ……妾は今戻つたのですわ、本郷三丁目まで往つて來ましたの、材料の薬品を買ひに……」

「爾うか、其りや疲びれたらう。まあ少し休むていつたら可からう、ね、お父様もその何だ、久らく會はなかつたから……種々話も有るてな、」

「爾うね、二月ばかり見えませんでしたわね、什麼したのかと思つて居たわ、何か御商法でも……」

「さあ其れだよ、實は商法を始めようと思つてね、資本が……其の何てね……お前の處へ行ふかと……」

「あら徒戯よ、自家へ來たつて、お父様へ資本處ぢや無いわ、此方て借り度いくらわよ、」

「ぢや何かえ、親が路頭に迷つて、死んでも可いのか、」

「だつて夫りや別よ、未だお父様だつて、立派なお體で居るのですもの、働ざさへ」

「すりや何も路頭へ迷ふ事は無いでせう、お母様でさへ、女の體で働いてるぢや有りませんか、貴父は遊ぶからで、心柄だわ、」

「これ繁、何だい、親に對つて、」

「親だからつて、道は道でせう、」

「生意氣なことぬかしやがるな、」

「だつて、親らしい事、仕無いぢや有りませんか、」

「なあ萬兵衛さん、お待ちなさい、此處は往來ぢやありませんか、まあ我輩に任せさ、やあ繁子さん、其後は暫時でしたな、お變りも無くツて、」

「おや、溝口さんでしたか、父が種々お世話になります、何卒悪い智慧をつけたり、没常識ことなさらないやうにお願ひしますよ、ぢや何れ、今日は急ぎますから、」

「やい、お繁ッ、まあ待ちやがれ、」

「あれ、な何成さるんですよ。幸彦のが待つてます、」



「えいっ……」

掴んで引き戻そうとする袖を拂つて、スルリと身を變した繁子は、後をも見ずに裏門を駈け抜けて、珠突の角から、右へ曲つて去く、

「えいっ、いまくしる、」

呆然、見送つて居た。溝口に對つて、斯う云うた萬兵衛は、挨拶も早急に、溝口の慌て、叫び止めるのを後に聞き流して、霜解の路を、飛びくくに、記念碑の前の鳥居を仰いで、追分の通りへ坂を登つてゆく。

## 同二 醜くい女

一雨毎に、復活してゆく樹木の梢枝が、霞む裾を萌初ましむる蓮華草などに圍まれ、薄霜も何日か消える午後、活動寫眞の牛込館前の坂上に住む、大井子爵邸で

は、母堂の喜の字の賀の宴が張られた。

世襲の當主一政子爵は、襤褸大井と呼ばれた學生時代からの酷客家で、學校を中途退學する位、金銭の出費を嫌つた。それが、三十八歳の今日、母堂の喜の字の賀を祝ふのさい、餘り好しくなかつた。併し、華族の對面上、社會への何かの機會をと、花々しく開いたもので、集つた者等は、一族の男女に、益友の四五名が交つて居るだけだ。

餘興には、近所の踊りの師匠を頼んでお習ひ的な演藝を見せ、平圓盤を合ひ間合ひ間に聞かせて、折詰に正宗酒の二合入一本宛が、饗宴であつた。大井子爵を知つて居る者は兎に角、識ぬ男女等は森とした樹木で覆れてある庭中を、其處此處と歩き廻つて、模擬店のおでん、甘酒、ビール、壽司、團子もやと、探し求めて、麴町の土手を眺めた高臺へ出て、電車線路側に並ぶ賣店を望んで、慌た男女も在つたそふだが、それは後の話で、推して知る可き宴遊會である。



泉水から、築山へ釣るされた提灯を仰いで、松の根へ腰を下ろした。家庭女教師の大鈴清子は、年齢の二十六歳には見えない、濃化粧をして、心持酔ひを帯びた顔を、そよと吹く春風に戯らせて、幕を張られた餘興場を眺めて居る。

「やあ、大鈴さんぢやつたか、今日は御苦勞ぢやつたね、疲れたぢやらう、ハツハツ、併し、金のかゝる催しぢやつたですよ、此取り返しを、大に儲けにや成らんが故郷の方に、何か儲け話が有りませせんぢやらうかな、報酬は出しますよ。」

清子の傍の榻に腰を下ろした。一政子爵は、意味有り氣に、一瞥と清子を見る。そして巻煙草の灰を指先で落して、笑ひを含ませた瞳を光らせる。

「ホ、ホ、まあ、妾になんか女の事で、儲け話なんか有りやしませんわ、子爵様こそ世間がお廣いのですもの、教員の身で、ホ、ホ、御冗談でせう。」

「否、冗談ぢや有りませせん。實際ぢやから言ふのですわ、な、聞けば、貴女のお父様が、材木の仲買ぢやとか、怎麼ぢやらう、少し此方へも……、」

「まあ、ホ、ホ、ホ、眞面目にお成り遊ばして、お戯ひ成さいますな、父の商賣なにか、人足のやうな者でして、年中山から山を歩き廻つて居る、山男見度な者に、何て子爵様のお相手に成るものですか、無教育な、金儲けのみに走つて居る。進取の氣分的で無い、賤業者の父へ……、」

「いや、金儲けする者を、爾う卑下しちや不可、何が故の金儲けと云ふのを最初頭脳へ入れて、其人の人格品性を論じて貰ひ度い、失禮ぢやが、貴女は教職の身であるから、勢ひ金錢に對する。卑見もするだらうが、現在は、爾う云ふ世紀ぢや無いのぢやてな、ハツハツ、時に大鈴さん、今日は見違へる程、美人に成りましたな、否何日もぢやが……、」

「あれ、子爵様、厭て御座いますよ、羽髪にお煽動なすつちや……妾困ります。ホホ、」

顔を紅くして、下を瞰た清子は、胸の躍る思ひより、頬の熱るのが、耐らなく嬉



しい苦を覺えた。

「ハツハツ、まあ下を瞰んで、顔を上げなさいな、何も私ぢやからとて、同じ人間ぢや無いか、取つて喰はふとは云はん、ハツハツ、併し、大鈴さんの如な、美しい、教育もある。即ち、才色兼備した婦人は、まあ餘り無いぢやからね、嗚ぞ……ハツハツハツ、羨やましいぢや、」

「あれ、子爵様のお口の甘味……妾なんか、塵箱に、うよ／＼居りますわよ、お冗談ばつかり……」

「否、冗談ぢや無い、事實美しい、私に妻が無くば、是が非でも、貰ひ受けるぢやが、大鈴さんは厭ぢやらう、ハツハツ、幾歳ぢやつたつね、」

「まあ、御冗談を……」

「ねえ大鈴さん、貴女……」

松の木の間から四邊を際して、榻を清子の傍へ迂らした子爵の一派は、體がこゝ

ろもち慄へて居た。

「あれ、子爵様……」

執られた手を、振り放さうとした清子は、ソツト周囲を、上眼使ひに眺め廻して片手で胸を抱へた。

「な、大鈴さん、私や悪いやうにはせん、貴女の前途へ對し、必ず考へもある。假令妻を離別してもぢや、愛の爲めには、替られんからな、」

息をのむだ子爵の唇が、清子の頬にふれんばかりに囁やいて、酒の爲めにか、充血した眼をあげて、後を振り願つた。

「お言葉が眞實なら、妾として嬉しう御座いえますが、若し奥様に知れましたは、お坊ちゃん嬢ちゃんのお教育家として、社會へ顔が出されませんですから……」

「……否、其時は、又考へもある、な、私の心を買うて、何卒愛を受けてはくれんてすか、」



「兎んでも無い、お言葉は……、」

「之れ程お話しても、お聞き入れ無いのですか、」

「否、爾う云ふ譯では御座いませんが……、」

「では、承知して下ださつても……、」

「ハイ、否、御存じの通り、教育家として立つ身に、そればかりは……それも、奥様がお在なくば兎に角、否、假令御在御座いませんでも、卑賤い百姓の娘が、ホ、ホ、何て子爵様の……、」

「そりや不可、假令如何なる者の娘であらうと、愛は美しくするものぢやからな否、愛の爲めには、増糖の妻も、犠牲にせにや成らんでな、此大井一政も、貴女の爲めには、子爵てふ肩書も呈する。」

「……、」

「私の心が、解りましたかな、大鈴さん、清子さん」

と云ひ乍ら、清子の腕を、腋下へ引き寄せやうとすれば、それを振り拂ひもせず倒れかゝつたが、愕然、引かれた手を振り放ち、熱る頬を紅めて、躍る胸を慎めようとして、逸む息を押へ、

「あれ子爵様、泉水の橋を……、」

指さし乍ら、衝つと立つて、もつれた糸を丸めたかのやうな、躑躅の枝を折つて俯瞰いて居る。

「ひ、うむ、彼女は、岸田が連れて來た。工學士とかの妻君で、神経症を治する方便に、賑かな處をつてな、私の宴遊會場へ案内したんぢやが、私こそ醫者に使はれる、迷惑なものぢやよ。」

と言うて、橋の中央に佇立、頭髮を前から分て、きゆつと後で結び、縞お召の燻んだ色へ、處々白く刺繡を見せた羽織の紐を押へて、かすりの大島の裕衣を裾長に着た下から、微風の度び毎に、こぼれる長襦袢が、盪乎した姿を艶に寫して、耐ら



なく男の氣をひく、

「む、美しい女ぢや、顔は成る程蒼くつて病人らしいが、彼れだけの容色をもつて夫を妬とか云ふが、夫と云ふのは、疲妬れるほど好男子と見えるな、うむ、美しい女ぢや、彼の女を見ると、夫と云ふのも想像される。姿も好い……、」

斯う云ふ、子爵の一派を、昵視と眺めた清子は、耐ら無く、其女が憎かつた。自分の權威……女と云ふもの、總ての誇を奪はれたかのやうに、怨めしく思はれた。工學士と云ふが、何處の誰人……かと、見惚れて居る。子爵の顔を、冷やかに仰いで、言葉を反らし、

「子爵様、若し、子爵様、何を那麼に御覽遊ばすのですか、梅はもう遅う御座います、すが、薔薇の花でも……、」

「否、花ぢや無い、それ、彼の美しい女……ハッハッ、否何……女も美しいが、貴女も別して美しい、」

「まあ、ホ、怎麼せ別して美しいのでせうとも、ですから、御冗談おつ仰やつて、お戯ひ遊ばすのね、あ、醜ひ女に生れた不幸……、」

眼の邊りを半分て押へて、くるりと後を向き、肩を慄はせて居る。苦笑ひをした子爵一派は、洋杖を軽く地へ突き、巻煙葉へ火を點けながら、

「ハッハッ、怒つたと見える。私が悪かつたぢや、何の彼の女、假令美しいと云ふたからとて、他人の妻ぢや、それに病人ぢや、ハッハッ、美しいと云ふだけで、味のある花……女ぢや無い、況て、貴女と比べ女に成りやせん。貴女が牡丹花なら、彼方は、散りかけに梅花で、もう風情がありやせんものな、」

「あれ子爵様、那麼大きなお聲出して、聞こえましては……それ、此方向きましては在りませんか、」

「ハッハッ、何、此邸は私のもので、彼方は招いた大事の女ぢや無い、所謂隙見に來た、無禮者……ぢや誤弊ぢやが、門外漢ぢやもの、怒つたからとて、及ばん客ぢ



や、ハツハツ、心配せんとな、」

此郎は、私のものおやと云はれた言葉が、清子の耳には、強い或る誇りの念に力ひで、つつと子爵に接近しながら、子爵の肩の邊りの塵をとつて捨る。

「やあ、肩に塵があつたか、之りや済ん……。」

「否、怎麼致しまして、御免遊ばせ、」

「何の、禮するのは私からぢや、たゞ、此方を凝乎見て居るなら、彼の妻君は、ハツハツ、貴女と二人で並んどのから、羨むどるのぢやらう、ハツハツ、」

「ホ、、餘り嫉妬するのも、場所にも依りますが、他人のまで……ホ、、して御前様、何等の奥様なので御座います。工學士とかつて……。」

「何だ。發明狂と評された。大葉幸彦の妻君ぢや……。」

「えつ、あの幸彦の……。」

呀つと思つた清子の胸は、燒鐵に押しつけられたやううに、耐ら無い苦痛に體を

悶えて、憎さ氣に、橋の上の女を望み、もう總ての誇りを奪はれてしまつたとばかり、きりくつと半巾を噛み裂き、呆氣る子爵の前へ、裂かれた半巾を、パサツと地へ投げ棄て、怨めしい炎る眼の腫が、憤然据つて睨む態度の凄恐しく光つた。

同三 離別の苦境に

博物館前の、彼岸櫻花が咲いて、急に春が寄せて來たやうな、上野の森は薄す霞みして、近い中には、一重櫻も咲くか、堅い蕾花も脹らむて、情を解うとして居る。

襟の垢に汚れた袷衣に、銘仙のかすり羽織の袖口が、目に立つて磨れ破れ、口綿が少し見えたとのを着た。三十歳に成る大葉幸彦は、重さうに抱へた包みを腋下に、急が足で杉の木立を抜け、動物園の塀に添うて、圖書館へ向つて歩む出合がしらに遇乎、足を止めて、風を切つて走る自動車の上を覗いたが、冷笑を頬へ表すと、ま



た其儘急ぎ足に成る。

「あらッ、幸彦……さん、若し、武田さん、鳥渡自働車を止めて下さいな、否、元の道へ戻して下さいませな、お禮はしますから、ね、早く……」

「えつ、自働車を……へい、承知しました、」

武田と呼ばれた運転手は、揮發油の臭ひを自棄に残して、元の道へ自働車を戻せば、窓から半身を現した女は、美術學校の通りへかゝるや、

「若し、貴郎つ、大葉の……幸彦さん、一寸お待ち遊ばして、貴郎ッ、幸……彦様……若しッ、」

止めた自働車から、ひらりと飛び下り。呼ばれて遇然顧みた儘、尙ほ急ぐ幸彦の袖を、追ひつく途端みに轉倒かけた足を踏むて、確り押へた自働車の女は、怨めしそくに、幸彦を仰いで、涙ぐんで居た。

「あつ、何、何を爲さるんです、お放下さい、人通りの甚しい往來で、人違ひさ

れちや困ります」

振り放さうとした幸彦は、女の顔を憤乎睨んで、袖掴まれた手を握つたが、愕然放して横向てしまふ。

「若し、幸彦様、決して人違ひぢや有りませぬ、貴郎と知つて、追ひ駆けましたのです。」

「ハッハッ、此幸彦と知つて、追ひ駆けなすつた貴女を、僕は知らん者です。さあお放下下さい、」

「否、放しません。妾の申し上げる迄は、死んでも放しません。何卒……ね、悪い處はお詫びしますから、」

「何だか知らんですが、御用がお在りなら、宅へ迄來て下さい、今日は急ぎますから……、」

「否、決して永くとは云ひませぬ、少しの間だけで御座います、何卒、お氣を悪く



仕無いで……、」

「困りますな、それに、御覽の通り。往來中ぢやあるし、急ぎの用もあるんですからな、」

「ですから、永い間とは申しませんが、暫時の間で御座います、ね、お願いで御座いますから……、」

「困つたな、宜しい、ぢや此處では往來だし、見らるゝ通りの姿ですから、貴女の御身分にも何ですし、元の公園地へ入りませう、而して伺ひませう、御用とかの事を……さあ其袖を放して下さう、」

「爾うて御座いますか、あゝ、眞實に嬉しう御座います。能くお聞き入れ下さいました。武田さん、貴方ね精養軒の前へ行つて其處で待つて居て下さいませな、之れは少しですが……、」

運轉手に、幾千かの包金を渡して居る清子を後に、先へ立つた幸彦は、博物館の

横路の杉木立ちの中へ入る。後から従いて來た清子は、幸彦の佇立むだ横に添うて、腰を蹲めながら、半巾で眼を押へ、

「怎麼も濟ませんてした。お急忙いのをお引き止め申し……其後は御無沙汰を致しまして申し譯御座いません。お變りも御座いませんで御機嫌宜ろしう御座います。」

「否、僕は、有りが度う。貴女も御壯健で、時に何ですか、御用と仰せるのは、何卒お早く願ひます。」

「ハイ、彼の……子供の事を、御存じてせうか……、」

「子供、行彌の事ですか、」

「ハイ、行彌の此頃を……、」

「否、二三月前に、偶乎尋ねる氣になつて、四年振りて會ひましたが、離れて居る爲か、愛情を抱て行たにも拘かはらず、思つたより情が移りませんでした。子供とても……爾うてせう。捨てるやうな親が、何で戀しいてせう、僕は、足ない想ひ



を浮べて戻つたさき。尋ねもしませんでした。反つて尋ねて遣つに爲めに、貰つた養親の心を害せにや成りませんからな、爾う云ふ理由で、其後の行彌が事は知りませんが、何うか成ましたかな……、」

「まあ貴方は……」

「否、その事に就いて、僕をお呼びに成つたんですか、夫れなれば、伺ふ迄も無い、貴女の良心に問うてから、僕にお話し下さい、僕は子供に對して、薄情かも知れませんが、彼嬢たのは、僕の關しは事ぢや無い、寧ろ僕は第二者ですからな、」

「そ、夫りや妾が悪う御座いましたか、貴方とても……、」

「ハツハツ、夫りや不可、僕は貴女と別れた時を、いまだに忘れませんが、貴女は怎麼か知らんが、僕は泣いて、貴女の連れられて去く姿を、星一つ無い、暗夜の中を隙して、睨乎見送つた心の胸は、張り裂かれるより苦痛思ひに掻きむしられて居ても立つても耐らない悲哀にうたれた。知つてゐる通り、僕の體は、追はうとする腕

や足を押へられて、身動きも出來ず、涙の眼に望むて……男泣きに泣いた。其時の貴女の態度は怎麼でしたらう、僕は何も言ひますまい、情死まで仕様として、身の上も考へず。岩舟山へ行つた時の情愛と云ふものは、もう見られなかつたと、終りに申し上げて置ませう。ハツハツ、莫迦な男ですよ。先達、子供に逢はうと思つた時、館林まで行きました。そして、別れた思ひ出のある大黒屋旅館の前を通りましてね、轉た、人生の悲喜交々と、表裏とを浮べて來ましたよ。否、失禮しました。あまり長話しましてね、」

「否……す、濟ませんで……御座います、」

「何、濟も濟んも、過去の若い考へからの何ですかからね、詫るにや當りません、僕こそ謝しますよ。」

「……、」

「相變らず、涙が出ますな、僕は、過去に歸つたやうな、美しい涙は見度いが、も



「う現今は見度いとは思は無い、僕には、繁子と云ふ妻が在りますから……、」

「あ、貴方……」

思はず。縫りつひた清子は、それを避やうとする幸彦の腕を、無理矢理に掴んで怨みに炎えた眼に仰ぐと、瞳が何時か涙に流れて、ホロ／＼と落す。

「な、何を爲さるんだ、」

「い、え、何もしません。貴方は、貴方は……、」

「えつ、僕が怎麼かしましたか……、」

「しましたとも、は、薄情……、」

「何、薄情……之りや怪からん、何が薄情です。」

「え、薄情ですとも、薄情だから、奥、奥様を……、」

「家内を持つたのが、薄情なのでせうか、」

「え、薄情ですとも……、」

「爾うですか、ハツハツ、學校を卒業ばかりで、立派な勤め處も有りながら、戀に狂つた僕が、總ての名利を投げ捨て、貴女と云ふ、彼の時の美しい貴女に愛を捧げたにも拘はらず。子まで在りながら、僕を捨て、去つた貴女と、捨てられた僕とに情の比較が出来ませうか、物質の戀愛に生る人と、精神の戀愛に終る人と、何方が美しいでせう。情が在りませう、苦しい別れを仕たのも、僕に罪がある……が、僕は痴情かも知らんが、死を貴女に呈して居た。或は、其死が、貴女にとつて、不満足でしたらう、勿論死が、何等の價の無いのは知つて居る。それは現今の考へて、死ほど美しいものは無いと思つて居ましたからね、」

「……………」

「そりや、貴女も、能く盡してくれた。眞の慰安者で在つた。僕は、忘れる事の出來ないくらゐ、貴女に對しては、今でも嬉しかつたと、謝して居る。彼れだけの厚い愛情が、何故別離の苦境に至つて、僕を棄てたか、物質に走つたか、尤も、妊娠



して居る子の前途を思つたからであらう。が、何故僕の手へ、産れた時抱させてくれなかつたらう。僕の居る處で、何故産てくれなかつたか、彼の時は、言はれる迄も無い、食べる事も、家とても無かつた。無理も無い……併し、僕の住所を知つて居る貴女が。何故出産と、其後とを知らせなかつた……らうと、子の愛を知る僕は貴女を怨……ハツハツ、愚痴だ。」

「否、失禮しましたね、僕ばかり勝手な言ならべて、」

「否、妾こそ……御用の在る處をお引き止めして、す、濟ませませんでした。けれど貴方、妾は貴方を怨むて居ます。いゝえ、怨みます。そりや妾も、彼のお別れた時は何と云はれましても、致し方がありませんでしたが、それも之れも、貴方を思ひ子を思ふから御座います。鬼になつて……戀しい貴方を棄てたのも、貴方の前途を思へばこそ御座います。そ、夫れを誤解なすつて、右左仰しやるのは、御無理

ては無いかと思はれます。」

「爾うでしたな、無理で在つたかも知れませんが、否大きに失禮申し上げました。僕が愚からてした。」

「あれ、何を仰しやいます。飛んでも無い、貴方に詫びて戴く爲めに、申し上げ度のは御座いません。」

「否、僕が悪いのでした。て何の御用ですか……、」

「爾うて御座いましたね、申し理由がありません、實は、お呼び止め申しましたのは貴方が、現在何を爲すつて在つしやいますやら、子供の事も御座いますし、其後の事も……と、存じまして……、」

「ハツハツ、那麽事ですか、其外の御用と云ふのは無いのですな、ぢや失禮します伺ふ事も有りませんからね、それに、僕は別れなかつたが、貴女の方から離れた女に、何の伺ふ事がありませう。やあ失禮します、淋しい情を慰めやうとなさるるのは



否、元の戀を呼び起さうとするには、もう徒然です。反つて、貴女の人格に障ります。見らるる通り、愛のみで生て行うとする僕は、物質に於て、寂しい程、貧乏人に成りました。其貧乏人を相手に斯うやつてお話なさるのは、自働車にお乗りになる御身分上、傷所をつけるやうなものです。」

「あれ、何で……、」

「もう止ませう。」

「否、何で、妾の……、」

と云ふた清子は、餘りに熱し過ぎた情の爲め、と云ふのは、大井子爵邸に於ける宴遊會の際、子爵の酔ひにまぎれて、清子の虚榮を煽つてからと云ふものは、殆ど虚榮に酔つてしまつて、前後を忘れて居た。それが、幸彦の姿を偶然に眺めては、それを黙過する事が出来なかつた。それも、彼の宴遊會の時に、幸彦の妻を知つて過去に於ける、情の炎かけて、衆人環視の的と成つた。其妻の姿が、耐らなく憎く

嫉妬を燃して、總ての満足を失つたやうに、胸の悶えが、ひし／＼と身をせめて、苦痛が、悲哀の淋しい影になつたのを、思ひ出して、幸彦を呼び止めたのも、虚榮と、淋しい影の満足とを得やうとして、幸彦の妻に對する、示威的なのであつた。要するに、誇りを見せて、幸彦の夫婦間を裂うとするより、幸彦をして、元の戀を呼び起させて、それに依る満足を望んで、幸彦の妻に對そうとしたに止まる。底級な虚榮なのだ。それが、幸彦から見る影も無い、貧乏人だと云はれて、始めて幸彦の姿を見た眼には、自己の虚榮を誇るに、何か、傷つけられたかのやうに感じて、耐らなく、斯う居るのが、厭であつたと共に、十分の勝利を得たらしく満足をした。」

「貴女、僕は、もう御用が無さそうだし、且つ、愚にもつかぬ御話なら、もう聞くことも無いですから、之れて失禮します、まあ、お體を大事に……、」

「ハイ、貴方も……、」  
虚榮の誇りから、急に、幸彦の姿を眺めて、卑しむやうな、冷やかな眼を向たの



が、語尾に依る、體を云々と云はれた。過去を偲ぶ温かい、力のある言葉を聞いては、やはり女だ。思はずホロ／＼と涙を落し、己が身を顧みて、後をもむかず去く、幸彦の肩の邊りが瘦て、俯瞰がちなのが、苦勞を追うらしく極だつて見える。「貴方……」

小聲で呼んだ清子は、遇乎、子爵てうのと、其令夫人と云ふ、虚榮を憧憬して、耐らなく家庭教師の身の上が、厭てならない。若し子爵が……呀つとして四邊を眺める、杉の木立は、深く夕霞の罩て、歸鳥の底く啼いて去く。

彼岸櫻 一親の心

麴町三番町の電車線路から、屈曲した老松の土手に沿て、二二三町行つた。檜門に大葉多茂津と書かれた表札に並んで、電話番町九五二二番の札が出て居る邸内へか

け、齟齬り無く、自働車や人力車の出入が甚しく、涙に眼の濡れた人に交つて、蒼白になつて居る男女などが、右方左方馳せ廻つて居る。

庭の彼岸櫻花を仰いだ。離れ座敷の十疊の室では、羽二重の真白い夜着を厚く重ねた上へ、骨のみのやうに瘦た。實業家として勢力を有する、有勳者大葉多茂津の令夫人美世子が、腦貧血に依つて、突然轉倒してから、二十日あまりの病苦に疲勞た體を載て、息も絶々な悲哀を深からしめて居る。

咳を、軽く二回ばかりして、強く三度目に咳を急込んですると、潑乎と眼を開け瞳を動して、何やらかを探し求めるやうなのを、一と膝進めた看護婦は、そつと腕の脈を調べて居たが、何思つたか、注射器を取り出して、寢て居る美世子の何處やらかへ、注射をして、凝乎昵乎て居た。せい／＼息を強くして居た。美世子は、吻つと息を吐て、スヤ／＼と寢入つてしまふ。

「若し、柳川博士、怎麼てせうか、愚妻の……」



「左様……、」

大島の羽織の袖を直して、醫學博士の柳川鹿三郎に聞いた。多茂津は、博士を仰いで、其眉の邊りを動しながら、ソツト美世子を顧みる。凝乎、眼を眠つた博士は絶望の吐息を吻つと洩して、

「……、御親類の方を、お呼びに成つた方が宜しう御座いますえうな、怎麼？ お氣の毒な事で、種々手を盡しましたがな、お察しします。」

「……、大に有りが度う御座いました。本人も覺悟は仕て居るてせうから、之れだけお世話に成れば、もう何も言ふ事は御座いますまい、喜んで居ませう。では、親類を呼ぶ事に致します。松子、松や、」

「ハイ、」

憂愁の面を伏せて、軽く令嬢を呼んだ多茂津は、ソツト涙を拭いて、奥で返辭をしながら、襖間際に手をついた。松子を顧りみて、病人へ兼ねたやうに、

「松子、お前忙がしい處を氣の毒だがね、電話で、高木を呼んでね、母様の病氣について、一寸来て下さるやうにとね、それから、久保や森中などへも、知らしておくれ……急いでね、お前に母様もお世話に成つたが、もう……喜んで居なさるだらう。」

「えつ、彼の母様が……、」

「之れつ、静になら、」

「ハ……ハイ、」

「早く、お呼びしてくれるやうにね、博士もいろくお手厚い御世話になつたが……お前から、能くお禮仰しやい、な、泣いて居無して……、」

「ハイ、博士、種々有り……が度う……御座いました。」

「否、爾う直ぐお力を落しちや不可せんよ。何、又能く成らんとも限らんですからな、」



「早く爲さう……、」

「ハイ、」と答へて立ち上つた松子は、十九歳に成る迄、現在りに、死てう痛刻な悲苦を感じた事が無い、電話室へ入つて、浪花の番號を呼んで、親類との話も、涙のみ先で、思ふやうに、口が聞かれなかつた。

慌たしく、病室へ入つた長男の慎男は、父の深い沈黙に扱はれて居るのを、耐ら無く悲哀を深めて、曇る眼をむけ、

「お父様、お察しします。あゝ……、」

「……何も言ふな……、」

「ハイ、」

ハラ／＼と涙を落して、悲痛な胸を抱き、母の寝顔を覗んで、肩で息をする慎男は、遇然何を思つたか、

「お父様……、」

「うむ、」

「幸彦はお呼びですか……、」

「幸彦……、む……呼ぶまう……、」

「何故ですか、」

「彼の親不孝を呼んだとて、反つて母の氣を重くさせるやうなものだ。それに、何の役にも……、」

「併し、人生三大事の二ですから……、」

「……、」

「お爺さん……、」

「否、私は、彼の親不孝の顔見るのも厭だ……。」

「それはお父様だけに止まるのでせう。母様が此際ですから、是非會せて……遣



つて下れさ。」

「否、成らん……、」

「お父様、ねえ、兄様が、あれ程お願いするのですから、妾もお願ひです、幸兄さんをお呼んで……、」

「何だお前までが……、」

昵視と、慎男を見た眼で、松子を顧みた父は、二年ばかりと云ふものは、幸彦に會つた事は無い、文通では無事を知つても、何をして居るか、雪、雨、風につけても、思ひ出さない事は無い、慎男が云はぬでも、會ひ度いと知つて居る。況て、母の臨終に際して、呼んで遣りたい、

「お父様、御立腹は御尤もて御座いますが、後で幸兄さんが聞いた時……嗚ぞ……ねえ、お父様……、」

「成りません。お父様ばかりぢや無い、御親類へまで御迷惑をかけた。惰落者の幸

彦を、怎麼して此所へ呼べますか、親の有りがたさも知らず、學校卒業させて貰つたのを、當然だと思つて、折角立派な地位の出来たにも拘はらず、肩書も忘れてか  
らに、女狂に身を持ち崩し、彼の態度は何だ。人の嫌ふ金貸しの食ひ物に成り、  
放蕩三昧に身を墮落して、品性も、人格も下劣にしたものに、何で母様の此際呼べ  
よう。彼奴は反つて宜い事にして、又皆さんへでも御迷惑をかけちあ成らん。」

と云ひ乍ら、吻つと歎息を吐て、顔横向たものゝ、莫迦な子程可愛いのは親の心  
だ。「噫々」親の心、子知らずとか、思はず吐息をまた吐いた。

「お父様、御尤もです、併し、此際なすから、幸彦も改心するでせうし、又、幸彦  
の事は總て引き受けまして、決して御迷惑はおかけしませんから、是非私に免じて  
お呼び下さい、松子もお願ひして居ますから、又、母様だとして逢ひ度いでせう、」  
「……、何で母親が會ひ度いものか、彼の莫迦を呼んで反つて母様の病氣を、」  
「うゝ、むゝ、あゝ」



涙と、眼を開けた。多茂津の妻美世子は、瞳を動かして周囲を眺めたが、ホロホロと涙を流して、長い歎息を吐き、骨のやうな手を空に左右させ、

「あ、貴郎、旦那様……、」

「うむ、む、何だ、眼がさめたか、此所に居る。何か用か……、」

「あの……、幸、幸彦は……、」

「何……、幸彦……、それが怎麼した、」

「居りませんか、せうか、」

「うむ、」

「呼、呼んで……、」

「……、」

「今、怎麼して……、居りませうか、ね、」

「……、」

「貴郎、否、慎男や」

「ハイ、何です、母様……、」

「あの、幸彦は来ませんかね、」

「ハ……ハイ、何、今来るでせう。」

「す、濟ないがね……早く来るやうに……、」

ホロ／＼と、涙を流して、子を思ふ苦痛ない哀情みを浮べる。同じ涙の情やりに咽鳴んだ慎男は、堪へられずして、ヨ、と泣き悶える松子の姿を見て、衝つと身を起した。

「兄様、何處へ……、」

「む、其の何だ……、」

「爾う……、」

兄に従いて、表座敷へ去つた松子は、間も無く門を自働車で出かけた。左關まで



行つて、松子の自働車へ乗るまで、何やら囁やいて居た慎男は、溢り落る涙を拭ひながら、電話室へ入つた。  
沈黙のまゝ、不孝の子を思ふ多茂津は、己れの苦思よりは、美世子の嘸ぞ逢い度からうと想ふ眼の濡れて、悲痛にうたれて仰ぐ空は、何時曇つて、しとくと春雨のする。

同 二 執 達 吏

彼岸櫻の花片が、何處からとも無く、杉垣を越て、天王寺を眺めた、千駄木町の大葉幸彦の住居縁に散り敷れた。  
八畳の座敷を、研究室に爲て、發動器の研究に従事して居た幸彦は、兩手を後頭へかけて、目的無く開け放した。障子から天空を仰いで、降り出した春雨に、厭な

思ひを寄せて居る。

「若し、貴郎、怎麼か爲すつて……」

内職に、裁縫物をして居る繁子は、針の手を止めて、幸彦を、覗うやうに聞きながら、小さい歎息を吐る。

「否、怎麼もせんがね、何だか今日は、氣が憂鬱しくつて不可、それに、材料は無し、あ……」

吻つとして、後を顧みた幸彦は、眼が濡れて居た。針を、縫かけた裁縫物の袖へさし、膝座寄つた繁子は、寂しさうな顔をあげて、凝乎、幸彦を仰ぎ、

「お困りでせうね、と云つて、今一錢もありませんし……怎麼したら……ねえ……貴郎……」

「否、心配せんでも宜い、何、材料が無くつたつて、もう之れだけ材料が揃つてるのだから、何とか仕て見よう。實物ぢや無し、模型に止まるのだから、」



「爾う、大丈夫……、」

「うむ、心配かけるね、苦勞させる……勘忍してくれ、近い中には、屹度……樂にさせるからね、」

「眞實……妾……、爾うなると、嬉しいわ……、」

「其のつもりで、始めようか、併し、腹が空つて來たが、未だ晝には成らんかね、それとも何食か……、」

「ホ、ホ、貴郎は、能くお腹をお空しなさるのね、」

「うむ、徹夜する爲か、朝飯が不味のぞね……、」

「毎晩ちや毒よ、いくら事業だからつて、妾が可愛かつたら、體を大事にして下さらなきな、」

「そりあ體も大事だが、事業もお前の爲めならね……、」

「まあ、嬉しい事、ちや其のつもりで御飯……あら……困つたことが、貴郎、勘忍

して下さいな、裁縫物が出來たら、少しばかりですが、お鳥目が貰へますんで、一生懸命に先刻から縫てたんですが……、」

「怎麼した、」

「あの……無いんですの……、」

「無い、何が……、」

「何がつて、おこ、め……、」

「うむ……そりや弱つたね、」

「勘忍して下さいな、ね、貴郎、今直き縫上がりますから……ね、濟ません……耐へて……、」

「耐へるも何も無いが……うむ……お前に氣の毒だね、研究事して居るばかりに、苦勞ばかりかけてな、研究さへ仕無かつたら、何も生活に苦勞も無いし、況て、平凡に生て行けてね、夫婦が困つたり。貧乏する事も無し、あゝ、僕は莫迦だよ。」



「あれ何です、折角御苦辛なされる事業を、今更何なされるなんて、それこそ物笑ひよ。妾が意氣地が無いから、貴郎をお困らせするんですわ、濟ませんわね、世帯まで御苦勞かけて、勘忍して下さいね、」

「そりあ僕の方で言ふのだ。許しておくれ……、」

「あれ……貴郎……、」

「あ、頭腦が痛い……、」

「えつ、あのお頭腦が……揉ませうか、」

「否、宜いよ、だが繁子、お前こそ體を悪くすると不可からね、少し裁縫を休んだら宜いよ、何、飯の一度や二度、假令生涯食はんからつて、事業の成功を期すものが、食事が何の……ハツハツ、夫婦が愛の喜びさへ、變らなきあ、苦痛なものか、」

「濟ません。貴郎、此所がお痛みなさいますの……、」

「否、耳の後頭の處だが、宜いよ、直きなほるから……、」

「此所……斯う押して、痛が有りませんか、」

「痛い所か、氣持ちが好い、繁子、」

「え……、」

「苦勞かけるね、」

「何です、ね、貴郎……、」

「否、濟ないよ、勘忍してなけれ、」

「貴郎、厭、那麼水くさい……、」

と云ひながら、幸彦の肩から抱き絶つて、ヨと泣き噎んで、耐らない思ひに體を慄はせる。

「これ繁子、な、何を泣く、泣いてくれるな、僕の心がつらひ、さあ、涙を拭いて……笑つてくれ、」

「濟ません。」と、



幸彦の、其膝へ泣き倒れた繁子は、無理から莞爾笑つたものゝ、涙の痕が濡れて居る。

「御免……誰人か居ませんか、お頼まう……。」

愕然夫婦は、玄關の邊を眺めて、顔見合せる。

「若し、誰人か居ませんか、御免下さい、」

「ハイ、」

幸彦を仰いで、立ち上つた繁子は、染がすりの着衣の前の亂れを直して、鬢の毛を掻きあげながら、玄關の障子を開ける。

「ハイ、誰人です。何か……、」

「あの、何は居ますか、大葉幸彦君は、」

「ハイ、居りますが……、」

「私は、斯う云ふ者ですが、一寸御面會を願ひ度いので、」

「ハイ、」

出された名刺を取り上げて、一目見た繁子は、愕然驚つたが、

「少しお待ち下さい、」

名刺を手にして、慌て、奥へ來た繁子は、蒼白になつた顔に、體を慄はせて、幸彦を仰ぎながら、

「貴郎、大變よ、怎麼しませう。」

「何が……うむ……。」

熊澤傳藏の代として、法學士加藤長太の名刺を讀んで、二度迄も書き替の證書を入れて在る今日、もう猶豫を請ふ餘地が無い、連帶者の友人は、遂は二三ヶ月前に朝鮮の鑛山へ轉任して終つて居るから、書き替處か、之れが辯解が無い、差し押さへは覺悟と云ふものゝ、押へらるゝものも無いが、折角苦心して研究しつゝ在る機具を、押さへられたなら、總ての望みが、水泡とならねば成ら無い。



唇を慄はせて、名刺を二三度讀んだ幸彦は、苦勞に瘦れた繁子の顔を見るに忍びず。齒を噛み締めて、吻乎歎息を吐いた。

「貴郎、怎麼しませう……、」

「さあ、此方へ通して貰うかな……、」

「爾う、大丈夫……、」

「宜いから、此方へお通し仕ろ……、」

玄關へ去つた繁子は、間もなく名刺の主を案内して、研究室の座敷へ通すと、其後から、詰め襟の洋服を着た男が、無遠慮にも従て來た。

「……私が、加藤と申す者ですが、豫て御報知して置きました。例の御用立金ですが、怎麼てせう。今日頂戴を出來ませうか、御支拂ひを……、」

「……、」

「御支拂が出來無いとすれば、止不得から、一時差し押さへ致しますつもりで、裁

判所の方に御出張を願ひました次第ですが……、」

「さあ……、」

「では、私が、熊澤の代として、執行致しますから、其のおつもりで、日限は、三週間で、其日限にお支拂ひ下されば、解除を致しますのでな、」

「……、」

「では、小川さん、執行を願ひませう。」

「承知しました。大葉さんとか、否やはなりませんまいな、」

「致し方がありません。」

「では、執行します。」

立ち上がった執達吏は、其處此處と見廻して、品物と云ふ品物へ對し、手帳へ記ながら、封印をしてしまふ。それを、呆氣にとられて眺めた繁子は、

「貴郎……、」



幸彦へ縫りついて、ヨ、と泣き悶える。執達史と加藤は、縫いかけた反物へ目をつけ、手に取りあげかゝると、慌てゝそれを引き拂つた繁子は、泣き聲振り立て、裁縫物を後へかばひ、

「あれ、これには不可ん、他人の物です。」

「ハツハツ、假令他人の物でも、此方に在る以上は、執行の権利が在るんです。若し、事實上他人の物なら、改めて、その解除を裁判へ申し立てて、證明するんですな。さあ、此方へお渡し下さい。」

「いゝえ、假令何であらうと、之ればかりは……、」

「隠すと、爲めに成りませんぞ、」

「若し、加藤さんとか、失禮な言ですが、其の裁縫物は、事實隣家のですから、それだけは止めてお貰ひしたい、他の物……と云つて、立派な物は無いが、差し押さへられるのを承知なんですから……、」

「宜ろしい、特に、之れだけは止めませう、では、御覽の通りですから、悪からずにな……、」

「ハイ、致し方がありません。」

挨拶も早急に、差押への假執行した二人は、幸彦に送られて、玄關から出て去つたが、泣き伏して、身を悶えた繁子は、悄然と戻つて来た。幸彦を見るより。ツと泣きながら縫りついて、

「貴郎……濟ません、」

「繁子……」

父にと、去年の夏頃、幸彦の厚意で、高利と知りつゝ借り入れた金に就いて、悲惨な現在を見ては、怎麼詫びの申し様も無い、況て、目下大事の研究中の機物まで押へられた以上は、生命とまで言つて居る幸彦に、死の宣告を與へたやうなものだ濟ないと、體を慄はして、泣き嗚咽ぶ繁子の脊へ手をかけた幸彦は、頓に言葉も出



ない、封印された機械を眺めて、齒を噛んで、涙の眼に睨んだ。  
 門の邊りて、自働車の止まる音がすると、軽く踏む駒下駄が、玄關に聞こへて、格子戸の開くのが、夫婦の耳へ強く響かれる。ハツと顔を又見合せて、不審そうに、體を起した幸彦は、片膝立てた足を直して、繁子に眼て何やら語る。傾いた繁子は、座敷へ飛び散つて來た。桃の花片を眺めて、吻と息吐て涙を拭く。

### 同 三 莫迦な僕だ

心臟を躍らして、借金に依る執達史の行爲を見た繁子は、復……と云ふ或る恐怖に襲はれ乍ら、玄關の障子を開けて。外の新客を仰いだ時、奇異の眼を睜つて、吻つと膝を退つて、思はず後を顧みた。

大島がすりの茶がかつた。燻むだ色織の道行に、お召の着衣へ廣く出した青黄色

の襟が、透とほるやうな白い顔との對表をして、桃割鬘に結つた頭髮が、其女を語つて居るらしく、腰をかゝめて、寂しい微笑を口許へ浮へ、

「あの、兄の……幸彦が居りますてせうか……、」

「ハイ、あの……貴女は……、」

慌て斯う答へた繁子は、腰の帯へ手をあて、頬を紅め乍ら、伏し眼がちに成る。

「妾は、幸彦の妹松で御座います。」

「え、あのお妹……さんの……、さあ何卒……、」

「爾うで御座いますか、では失禮します。笹川さん、暫時待つて下さい、」

自働車の運轉手に、言葉をかけた松子は、手にしたシヨルを傍へ置いて、道行を脱かゝると、

「何卒其儘で、春とは云へ、未だ寒う御座いますから、」



「否、澤山着て居りますから、御免下さいませ。」

お召の荒い模様の羽織の襟を直して、着衣の裾を重た松子は導びく繁子の後から憂苦しみを抱て、幸彦の研究所へ通る。松子を眺めた幸彦は、思はず組んで居た腕を放して、眼を睜りながら、

「あゝ、松子か……、」

「兄様……お變りも御座いませぬ。」

「うむ、お前も丈夫さうだが、家の皆さんは……、」

「ハイ……、」

「松子、何を泣いてる。怎麼かしたか、」

「……兄様……、」

「うむ、」

「兄様はね……、あの何も御存じ無いのですか……、」

「何が、怎麼したと云ふのか……、」

急込んだ兄は、松子の泣き咽喉んで居る姿を見るより。若しか……家に……と、膝を進ませて、泣き伏す松子の體を起し、

「これ、泣いちや分らん、怎麼したんか、」

「……、」

「松子、何が悲しいのか、僕は、涙が嫌ひぢや無いか、えゝつ、何を泣くのだ。家に何かやつたのか、確り云へ、これ、早く言はんか、」

「ハ、ハイ、兄様、復癩癩を起して、其れ處では有りませぬよ、母様が……あの母様が……、」

「母様が……、」

「えゝ、御危篤……なの……、」

ワツと、袖を顔へあて、泣き伏す松子を眺めた幸彦は、愕然として眼を睜り。夢



では無いかしら……と、己れの身を顧りみて、繁子と顔見合せ、  
 「む、あ、爾うか、能く知らしてくれた。松子、眞實だらうね、實際だらう……  
 ……な、」

「え、何で虚が云へませう。」

「うむ、夢ぢや在るまい、」

「兄様、妾、お迎へに参りましたの……、」

「えつ、迎いに……」

「え、父様は、行くなつて……、仰しやいましたが、大兄様が、是非連れて来い  
 つて、母様に會せにや無らんつてね、それで妾……参りましたの……、」

「うむ、爾うだつたか、能く来てくれた。面目なくつて家へは行け無いが、母様の  
 御危篤と聞いては、那麽事思つてる場合でもあるまい、松子、僕は行くまい……  
 否、家へ行くまい、行つて悲しい思ひをするより。行かれ無い身の苦痛が……松子

察してくれ、お前の親切は有りがたくお禮する。」

「えつ、兄様つ……、」

「貴郎ッ、」

「……、」

「兄様、貴方は、人の道を……、」

「知つて居る。」

「あの御存じ……、」

「うむ、知つて居るから行か無いのだ、」

「それでは母様に……、」

「松子、兄様の厚意と、お前の親切とを有りが度いと僕は思つて居る。況て父様の  
 お心中も察して居る。また、母様も……莫迦な僕を……き必度會ひ度いと思し召し  
 下さるのを、濟ない程有りが度と思つて居る。變れるものなら、僕が……僕の體を



差し上げ度い……親不孝の限りを盡して、御心勞をかけたばかりでも、御體に障つて居るのだから、出来るなら、變つて死に度い、が、其れも成らず。と云つて、母様のお傍へ怎麼して行やう。此苦しい胸の中を察してね、何卒……、」

「……兄様、貴兄が、それ程お心があつきに爲つて入つしやるなら、もう立派な身も御同様です。何も、お苦しみなさる事はありませんから……、」

「お前の心は察して居る。併し、行きますまい、反つて、御危篤の母様へ、思ひの種をお残させ申すやうなものだ。否、皆さんへ、御苦勞をかけるやうなものだから此のまゝ放つて置いておくれ、親不孝な奴、憎い奴と思はれても、僕は、何も……、」

「貴郎、他の事では御座いませんから……、」

「何も云ふな、僕は心を定めて居る、」

「それでは妾が……、」

「ひ、否、お前の心の濟ないのも知つて居る。けれど、僕の心中……は、ゆ、行

き度程に思つて居る。」

「それなら、誰れに氣兼ねが有りませう。お實家へ行くのですから、妾もお進めします。貴郎、」

「……、」

「ねえ、貴郎……、」

「お黙言ッ、假令母様の御危篤だからつて、そう輕々しく行ける身の上ぢや無い、放蕩ものとして、出入りを禁じられた家から、母様が御危篤と迎へられても、ハイと、喜んで行けますか、大勢の親類方の前へ對して、のめくと通れるか、悪く見られるとも、善くは思はれない。否、何と云はれても、僕は不幸の子で通す。邪推からと思はれても宜い、一酷、慘忍、薄情漢と呼ばれても……、」

「兄様、貴兄は、何か思ひ違ひを御自分で遊ばして居らしやるのね、兄様のお心さへ……、」



「嫌だ。生あれば死あるんだ。研究中は面會謝絶だ。ハツハツ、我輩の研究そのものは、國家社會的の大事業だ。俺の生命だ。其生命を取られて……あ、母様が御危篤……危篤と云ふのは、死の前を云ふものだ。縁起でも無い、止せ、止せ、」

「あ、兄様……」

「貴郎ッ、ど怎麼かなさいましたか、」

「これ、何するんだ。母様が病氣だと云つてるぞ。確りしてくれんぢや困るよ。お前に今寝られたら、」

「若し、貴郎ッ、何、何を被仰やいます。」

「兄様つ、あ、貴女とは、始めてお目にかゝりましても、未だ御挨拶もしませんが、お許し下さいませ、遂ひ母の事で、氣が轉倒して居るものですから、」

「否、妾こそ、何卒宜しく……」

「繁子、母様が死んでしまふぞ、何してるんだ、早く飯にしてくれ、今な、俺の大

發明を見せて遣る。」

「あれ貴郎、それは……」

封印された。發動機の模型へ手をかける幸彦を押へて、オロ／＼涙聲に止めた繁子は、松子の前へ、差し押の後の光景を、ハツと恥入る心の苦しさ、それに、幸彦の態度が……もう身も世も無い悲痛に襲はれて、幸彦に縋りついたまゝ、ヨ、と泣き鳴咽ぶ。

「貴女、兄様が、怎麼か……」

「ハハイ、何だか御態度が、若し貴郎、確りして下さいね、貴郎、お妹さんが……」

「兄様、怎麼かなさいましたか、確り遊ばせ、兄様、」

「金貸しが何だ。心配するな、俺の事業が成功すりやあ、三越へ連れて行つて遣るぞ。迎へに来たつて、俺は行くものか、母様が死ぬつて云ふが、人間は一度は死ぬものだ。若い中に働いて置けば、蟻の蟲でさへだ。梨が好きだつて云ふか、俺は嫌



ひだ。虚榮の權化の女なんか、根津の權現さんへ行きや、ハツハツ、お稻荷さんも釋迦の屁一つだ、確りしろッ、

「貴郎、貴郎や、何てずね、困るぢや有りませんか、」

「兄様、お氣を確りして下さいませな、妾が悲、悲しう御座いますわよ、兄様ッ、たら……、」

「貴郎ッ、あッ、怎麼したら……、」

幸彦の體から、手を放した繁子は、ワツと體を投げて泣き伏す。それを眺めて、ニヤ／＼笑ひ出す幸彦を、松子は耐ら無い悲しみに、思はず後へ反て、

「うじん……」

と唸り聲をすると、バツたり倒れてしまふ。

「あれッ」

「ふッフ、ハツハ、ハツ、愉快だな、」

狂氣した良人、逆上して氣絶した松子の二人を眺めた繁子は、轉倒反るばかりに驚いた、嬉さうに笑ふ幸彦の袖を握つて、松子を抱き起し、其處へ出された茶の冷たのが、早速の氣つけ、

「若し、松子様ッ、お氣を確りねえ、」

「ハ、ハイ、」

細く眼を開けた松子は、繁子の膝へ絶つて、わツと泣き出す。

「お氣がつかましたか、確りなさいませね、」

「ハイ、有りが度う存じます。」

繁子の膝を離れて、眼を拭ひながら、禮を云ふ松子の後から、唐突顔を出した。

借家の差配をして居る芹澤正吉は、薄笑ひをして、腰をかゞめながら、

「失禮御免下さい、先刻つから再三お尋ねしましたんですが、お返事が有りません處へ、大きな聲がしましたんで、御免蒙むつた譯ですが、何か變りました事でも有



りますか、實は、もうお家賃が四ヶ月滞つて居ますので、ハイ、それ傍々……、」  
 「これは、差配様ですか、否、何てですか知りませんが、少々家に取り込みがありますので、甚だ失禮で御座いますが、後刻に……、」  
 「それは不可せん。其の後刻が度々で……、」  
 「あれ、客來も御座いますし、良人も少し、頭腦が變て御座いますし、恐れ入ります……、」

「てげすかい、成る程ね、ではお待ち申しますが、何も因業な事は言ひませんからね、宜しく……、」

「ハイ、畏りました。」

借債に對する差し押へ、母が危篤、幸彦が発狂、家質の滞り、語つたものか、語らねば胸の苦痛、語れば幸彦の顔ばかりか、女特有の誇りへ傷を求め悲苦、神経病の治まつた繁子は、グット來る逆上の血を、愕然押へて涙に噎び、

「若し、松子様、何も申しません。お願いです、何卒妾も同道させて、幸彦をお家へお連れ下さい。假令氣が何であらうと、又、憎ひ不孝者でも、親子の何で御座います。いいえ、何も、御世話に成らうとするのぢや御座いません。悔心なすつて、或事業の御研究に熱心なさいましたのが、御覽の通り、金貸から差し押へられて、生命をとられたと、お悲みの處へ、母様の御危篤、もう幸彦として……、」  
 氣の亂れるのも無理は無い、己が悲哀のひしくと胸へ刻み込まれる苦痛よりは、幸彦の身の上が耐ら無なく想ひを増させる。松子は言葉なく繁子の手を取つて、ハラハラと涙にくれた。

同 四 發 作 狂

揮發油の臭ひを後に、砂塵を空へ飛散させて、けたたましく警笛を鳴した自動車



が、白山御殿坂を降りると、砲兵工廠の街路を、麴町指して馳驅して去く。  
土手に沿て、ひた走りに馳つた自働車が、大葉家の門内に入ると、門扉がひたと閉ざされてしまつた。

「からッ、我輩を何處へ連れて去く、ハ、ア華族の家だな、俺は華族は嫌ひだぞ、虚榮、權門、父祖の功、俺は大嫌ひだ。嫌ひな物を食はせる奴が……、」

「あれ貴郎、何を仰有やるのですよ、確りなさいな、妾が困りますからさ、貴郎、」  
「兄様、確りして下さい、自家ですよ。」

オロ／＼二人は涙に嗚咽びながら、噪騒幸彦を抱かへるやうに、奥へ連れて行く、美世子の病床を圍んで、悲しい思ひにうたれて居た。多茂津を始め慎男や親類の一同は、幸彦を連れて入つて來た。繁子の姿を見るより、眼に眼を見合せて、銘仙の羽織に、染がすりの袷衣へ、博多と羽二重の腹合帯を締めた。此場へあまりに相

應しからぬを、卑氣だ眺める。

「御免下さいまし、さあ貴郎……、」

「やあ並んだな、我輩の研究発表を見やうとして、ハツハツ、瓜や南瓜が能く熟つたな、此年は當り年だ。」

「何ですよ、貴郎」

「ハツ／＼、」

動かりと安座を跌いた幸彦を、慌ててたしなむに繁子は、愕乎四邊の人達を見てオロ／＼する。

「松子、何だ此婦人は……、」

「ハイ、あの幸兄様の奥様です。」

「何、幸幸の女房だ……。」

「ハイ、始めまして、妾は幸彦の妻、繁と申します不束女で御座います。何卒宜し



く、して貴方様は……、』

「幸彦の……うむ、私は……その何だ。幸彦の父親ぢやがね、爾うですか、幸彦の成る程……、』

「お父様、あの此お女は、幸兄様の爲めに、御苦勞なさいましたのよ、それはお氣の毒な……、』

「ハ、ア爾うか、これ幸彦、汝は何と云ふ態度だ、飛んだ良い女房と、其態度で宜く來られた。』

「烏渡伺ひますが、今日は如何な事で御座いませう。姿を御覽に入れる爲め、お伺ひしたのでは御座いせん、誠の心で、幸彦はお母様にお會しに參りましたので御座います。それに、種々の苦勞があります處へ、お母様の御病氣を伺ひ、御覽の通り氣が轉倒して居りますんで……、失禮の處はお詫び致します。』

「爾うですか、それは御苦勞でした。幸彦は幸福な奴だ。母の……氣の狂ふのは罰

だ』

「幸彦、私を知つてるか……、』

「凝乎幸彦の顔を睨んで、ほろ／＼と涙を滾した慎男は、齒を噛み、脣を締めて肩を怒らせる。』

「兄様ツ……、』

「熟視られて、思はず我れに返つた幸彦は、一時的發作狂の爲め、前後を忘れて、有らぬ事を口ばしりながら、狂態をして居たのが、胸を刺す情の兄慎男が温かい言葉に、五官の血の冷きつたのが、かつと一時に沸き立つたかのやうに、慎男に縋りついて泣いた。』

「明瞭つたか、む、早く母様に會へ、お前の來るのを、お待ち兼ねて居たぞ。幸彦は／＼はと……、』

「濟ません、お母様……幸彦です。』



「あゝ、うむ、幸彦かい、よく来ておくれた。體は丈夫かい、變りは無いかい、母様は會度かつた……」

枕に埋められた顔をあげて、鈍い力の無い眼を開けて涙に鼻をつまらせ、病瘦れた手を出して、幸彦の手を探し求める。

「母様、ご御苦勞かけました、申理由が有りません。」

「幸彦や、お前……人間に成つておくれよ、母様はね、お前ばかりが苦勞で、眼が眠が眠られない、」

「母様……、」

「過去つた不幸は、仕方が無いが、之れからね、心を入れかへて、誠の人に成つておくれ、」

「す、濟ません……、」

「お前が不孝ばつかりに、此母様は、お父様と、何日も喧嘩をするんだよ、お前さ

へ確りして居てくれたら、母様は、怎麼に安心するだらう。安心させておくれ、改心してね、立派な人間に成つておくれ……、」

「あゝ、母様……貴母までが……未だ誤解なすつて居る、僕は、それが痛い、悲しいのです。」

骨ばかりの瘦れた母の腕へ、體を投げかけるやうに伏して悶える幸彦は、男泣きに泣き出した。

二三年前迄は、何と言はれても、返す言葉が無い、併し、人生の爲す可き道を知つてからは、作型られた國家的社會の事業として、研究に窮た完全の發動機製作と飛行機の改作、今既や……と云ふ間に、金貨の差し押しに會つた悲惨な現在、だが、心と行爲とに於ては、何等恥る處が無いのだ。母の危篤の切にも、堂々として來られる身の上だが、社會の表面では其れを許さない。まして、懶惰者と卑見んで居る親類等の前、父の恥、自負心の傷つけらるゝやうに思はれて、松子の迎へを斷



る胸の悲苦が、大膽で小心の胸を逆上させて、男らしくも無い、發作狂となつた。それが、強い温かい情の兄の眼に癒された時、母の情愛ある眞の言葉を聞いた耳に未だ誤解されて居るのが、耐へられ無い悲痛の極だ。

「幸彦や、泣いておくれで無い、母様が泣き度いくらのお前を思つてるのだよ、泣いたからと云つて母様の病氣が癒るのぢや無し、泣くほど心が苦しければ、何卒改心して、立派な人にね……」

「あッ、未だ誤解なされる、僕はそれが、否、はい、必度立派な人に成ります。母様に御安心させますから、何卒癒つて下さい、確りなさつてね、僕、早く此事を聞いてたら、僕がせずとも、家内に看護させましたものを、濟ません……」

「あ、お前嫁さんを貰つたそうだね、何處に居る。何を爲て居る。母様會ひ度かつたもの……」

「えッ、あの、妻に會つてくれますか、これ繁子、喜んでくれ、母様が、お前に會

ひ度いつて……」

「へえッ、妾に、まあ……貴郎、嬉しう……」

「あの叔母さん、否、幸彦君、失禮だが、親類の一人として、お會せする事を止めます。其奥様を、叔母に會ふ事を、斷然止めます。不賛成です。」

「えッ、何ですつて……」

「何方の御令嬢で在りに成るか知らぬが、お目にかゝるのは今日が始めて、我々の對面に關します……」

「ひ、ハッハッ、失禮だが實三さん、貴方は、體面をしつて居ますか、否、御存じぢやあるまい、知つて居なされる貴郎が、此場で親類顔なされるのが、先づ體面を忘れて居るのだ。忘れやせんですぞ。僕は、恥を云ふが、深川の芋屋の二疊で、落魄で在つた當時、非常な熱病が爲め、貴方を親類の其一人者として、醫藥の代を借りに行つた。それも此妻を遣つたら貴方は怎麼云ふ事をなさつた、死に瀕して居る哀



れな親類の一人を顧みなかつたてせう。否云ふ。それで軍人でせうか。將校でせうか、多くの部下を訓導いてゆく、大隊長でせうか。」

「これ幸彦、何を云ふ……、」

「兄様、まあお黙言なさい、僕は、母の厚意を無視させやうとする。國家の面汚し久保實三君に對して大いに云ふのです。恩人の娘を捨て、下女を妻とした立派な國家の干城たる將校から、體面云々を云はれた以上、それが辯解をするんです。」

「貴郎、お止しなさいませ、獸相手にするよりは、折角母様のお情のお言葉ですから、會して下さいね、妾會ひます。お會しますわ、」

「うむ會へ、會つてくれ、誰人が何と云ふとも、お前は俺の妻だ。妻である以上は親子も同じ事、遠慮する事があらうか、會へ、俺が會せる。母様……、」

「これ幸彦……、」

「何ですお父様、」

「場所柄を考へろ、」

「知つて居ます。僕の爲めには、再生の恩人とも云ふ妻です。其の妻を、母様にお會せするに、何の遠慮がありません。反つて、皆さんして、僕が今日あらしめたのを、禮云うて貰ひ度いです。此家で、妻を貰つたのぢやなし、僕が終生の妻として貰つた女房です。お父様が、之れを止める事は無いでせう。況て、母様のお言葉ですもの……、」

「幸彦、母様へ、過失ないやうにね、」

「兄様、御心配なさるな、さあ繁、母様へ會へ……、」

「はい、母様、お目にかゝるは始めて、御座いますが、御覽の通りな不東女、何卒未永くお願ひ致します。」

「あ、お前が幸彦の嫁さんかい、頼みますよ、至つて我儘な者ですからね、嘸ど世話も焼るてせうか、何分ね……あ、もう之れで……、」



「若し、母様つ、あれ、確り遊ばして、貴郎、皆様御病氣が、若し看護嫌さん、貴女、何茫然して居るんですね、お醫者さんだよ、若し母様、確り、あゝ、折角お會して、貴郎怎麼しませう……ね、」

幸彦の膝へもたれて、ヨ、と身の不幸を歎き泣く、其妻を刎どけた幸彦は、物と云はず母の體へ取りつき、齒を噛みしめて、ほろくくと涙に嗚咽びながら、

「母様ッ、何故……ええッ、確りして下さいッ、僕がつらい、切ないです……母様ッ、母の體を揺り動かして、男泣きに歎き悶える。それと共に、慎男も松子も連られて、學校を休んだ弟の秋之助が、母に縋つてワツと歎く涙に倒れ伏す。

「ハツハツハツ、皆が泣くぞ。社交的の涙を出して、」

「えッ、」

一同が、はつとして、幸彦の高く笑つて言ふ態度に、眼を睜つて驚く、繁子は、復と、發作した狂氣の幸彦に縋つて、わツと泣き出す。

「貴郎ッ、しッ確りして……、」

「あれ兄様がまた……、」

「ひゝ、幸彦、確りしろッ、慎男が知つて居る。察して居るからな、氣を鎮めてくれ、確りして、母様の之れが見え無いか、莫迦め……」

「ハツハツ、泣けく、己れは、虚りの涙は無い、これ、揮發油を買つて來い、試験するから……、」

「あれ、貴郎つたら、確りしてね、皆さん御免下さい、御覽の通りで御座いますから、之れで……、」

幸彦の騒ぐ體を押へ抱かへて、一同の厭な顔する前へ腰を折り。挨拶しながら此室を出ようとする。

「若し、幸彦の奥様、私は何も云はぬが、之れでな、幸彦の面倒見て遣つて下さい十分にとは思ふが、之れの爲めて無し、母の此際だから……」



「何ですか、之れは……、」  
 「幸彦君の奥様、夫れは金だよ、遣ふ金だ。立派に社會へ通用する金を、叔父、即ち幸彦君の父様から、見受けるお困りを察して、恵んで下さるんだ、何せ其金が欲しいので来た……。」

「何ですつて、冗談言ひなさんな、妾はね、貧乏こそして居れ、汚れた金や、恵まれた金を喜んで受けるやうな女ぢや在りませんよ。幸彦だからつて、莫迦になさるな、妾の力でも、必度良人の立派にして見せませう。此様金惜きやお前さんに上げませう。」

婆つ沙り。久保實三の體へ叩きつけて、憤怒の眼をかゞやかして睨みつけ、ひとり狂ひ怒鳴る幸彦を引き抱へるやうに、一同の驚くのを後目に、冷笑を残して去く、胸にあたつて、封帯の切れて飛び散つた。紙幣を眺めて、呆氣にとられた久保實三は、速に言葉も無く、繁子の後姿を見送つて、唇を慄はせて居た。

意氣地

一 藝者でも意氣地は

青葉に暮るゝ日の、大川端は灯されて、糶糊とした川の面を渡る船が、靄の中へ消へて、櫓の音のみ石垣に寄せるさゞ波の間々に聞えて来る。柳月亭の二階の八疊室では、欄干へもたれた客と、床の間を脊にした客とが、高く笑つて、團扇の風を入れて居る。

「あッハッハッ、御戯談被仰やつちや不可、儲が三割も有る位なら、十分の配當はしますが、一割が漸々ぢやから、其のおつもりでお手てしるをな、」  
 「一割としても、多少より以上に見られますから、其のお考へさへ在つてなら、何も彼れぢやとて、厭な顔もせまいぢやからな、之れが以前の師團附であつたら、軍服の體面上、餘り乗り氣にも成れんが、豫備を命ぜられて、軍服をまあ脱いだから



には子供達の爲めにな、少し現代化されて置かんとな、ハツハツ」  
欄干を離れて、座敷へ居坐つた客へ、酒盃をさしながら床の間を脊にした客が、  
銚子を取りあげ、

「ハツハツ、之りや失禮、徳利は空ぢやつた、」

「ほう、空とは情が無い、ては何てすな、賣込人の名義は、子爵大井一政殿と貴方が初筆ですな、」

「左様、鐵材株式會社々長の私が、まあ總代ぢやからな、且つ、政府への信用も有るぢやらうから……、」

「宜ろしい、御心配なさるな、以前御承知の通り、兵器工廠の廠長であつたから、何かの便宜も在るし、容易に、事か運びるよぢやて、子爵から、大いに配當されんぢやな、何しろ目下歐洲戰亂の際ぢやて……、」

「ハツハツ、軍人時代から、道が仕込だ社交術は、下手な參謀の手にや勝いませぬ

ハツくくく、」

階段を踏む、軽い足音が聞こえて、衣摺れが縁にすると、未だ更衣したばかりの單衣の縮緬へ、光淋模様の縫繻した。揃衣の藝妓が二人先に後から半玉が一人従いて、箱を抱かへた下女が来る。

「今晚あり……」

「今晚あり、あら、半込の子爵様」

頭を下げた半玉が、斯う云つて座敷へ嬉しさうに入つる儲け話の紐の締め合ひをした客の二人は、藝妓半玉を見るより。眼を細くして居る。

立ち蹲んだやうに、愕然した藝妓が、伏眼がちに座敷へ入り。顔を横向るやうにして、三味線の棹を引き寄せる途端に、セルの單衣の上へ、無紋の鐵色羽織を着て太い髭を捻つて居る客と顔見合せ、呀つと三味線持つ手が慄へた。

「やあ、之れはく、幸彦君の奥様ぢや無かつたか、え、と、何とか云ふたな、爾



う／＼、繁子さんとか云つたつけ、僕に紙幣投げ出した。賢夫人てしたな、」  
 「久保君、其の藝妓知つてるのか……、」  
 「悪い事は出来ん、うむ、知つてるですよ、之りや以前工學士の妻君ぢやつた女だ。」  
 「うむ、てはあの何ぢやろう、大葉とか云ふ、」  
 「ほう、能う御存じぢや、」  
 「甚麼て見た事が有ると思つた。何ね、僕の邸で宴遊會を盛大にやつた時、岸田とか云ふ男に連れられてね、其時神経病だとかで、その療法の一つとても思つたか、賑かな光景を見せようとして、來たのを知つて居たからね、ハツハツ、不思議な面會ぢや、さあ此方へお出で、我輩は、宴遊會以來、貴女を忘れた事が無い、もう賣り物買ひ物ぢや、御亭主に氣兼ね有るまいてな、ハツハツ、之れから大いに招んで遣るぞ、先づ酌を頼んでからだ。」

「うむ、不思議ぢや、怎麼して藝妓に爲つたんかね、其後の幸彦君の、病氣は怎麼ですな、矢つ張お金が欲いので、恥を晒しの水轉と早がはりかね、飛んだ親類ぢや無い、知り人があつたよ。ハツハツ、立派な體面ぢや、彼の金を貰つときや、那麼淺ましい姿をせんでも、體面だけは續けたらうに、莫迦な奴だ。」

「な何ですつて、」

「おい、お前は我輩等に招かれた。藝妓ぢや無いか、金で憂鬱を晴させる女ぢや無いか、莫迦ッ、酌でもして、祝儀に有りつけ、」

「お氣の毒ですがね、お前さん達か、此處から招せたと知つたら、何も來や仕無いや、藝妓稼業をしたのは……遂ひ昨今だが、之れでも心までは藝妓ぢや無いんだよ、幸彦が……汝達に、藝妓がやたらに呼べるやうに成つたから、藝妓の價も落たが、毛蟲のやうな座敷で、意氣地の在る藝妓は、先づおことはりだよ。面白くも無い、妾や御免を蒙りますよ。」

「おい／＼、生意氣な事を云ふな、我輩が金を出して招んだ以上は、時間まで置か



にや成らんのだ。」

「金で招んだ、へん、返してあげますよ、何だ金が……、」

「生意氣な、汝のやうな奴が、藝を賣らんで、肉の切り賣りをするんだ。我輩に詫りや買つても遣るぞ、」

「失禮な言を云ひなさるな、之れでも、幸彦と云ふ立派な夫があるんだ。汝さんを軍人にした、恩人の親類の妾や女房だよ。恩知らずめ、」

「な、何だ、失敬な、今一言云ふて見い、」

「云いますつて、妾にや藝妓こそすれ、幸彦と云ふ、汝さんの恩人の家の妾や女房なんだよ。」

「え、ッ、能くも恥を……、」

其處に在つた。徳利を取るより早く、繁子の藝名小繁を目がけて、憤怒の力に投げつける。

「な、何をするんだい、」

身を替した小繁は、前の盃洗を手にするや、久保の顔狙つて、叩きつけると、肩をかすつて、床の間で颯つと破れて、四邊へ水が飛散する。

「やあ、汝ッ、」

躍りあがつた久保は、其處に置かれた三味線を掴んで、小繁の頭目かけて打ち下ろすを、手早く後から押へた子爵の大井は、怒り騒ぐ久保をなだめて、

「まあ待ち給へ、價が女だ。貴方の體面に關する。おい丸子、其の女を連れて去つてくれ、」

「何ですね、小繁さん、お客様ちや無いか、困つてしまふぢや無いの。あれさ、此方へッたら……」

姉藝妓の丸子は、涙に口惜む小繁を叱るやうに、二階を下りて去く、狼狽て駆けつけて来た女中や、帳場に居た女將が、怒鳴り散らす久保を鎮めつ詫つして、其處



等を始末る。

「怎麼したって事さ、お座敷へ出たばかりぢや無いの、困つてしまふぢや無いかね  
大事なお客へ……、」

二階から下りて来た。柳月亭の女將は、帳場の傍で泣き倒れて居た。小繁の姿を  
見るより。厭な顔して舌打ちをする。

「濟ませんてした。妾が悪いからなのですが、遂ひ彼の久保つてえ男が、濟ません。」

「濟ませんぢや無いよ、家へ来る人は、皆御身分の在るのばかりだからね、那麼事  
度々されちや、商賣が出来なく無るからね、眞實に困つちまふよ。」

「濟ません。」

「少しは、藝妓つてえ稼業を、考へて貰はなきや困るよ。家へ出入りするからには  
ね、過日だつて爾うだつたぢや無いの、麴町の華族さんが、あれだけの事迄するか  
らつてへのに、操が怎麼だとか、今時那麼野暮を云ふ女があるものか、それ程操が

大事なら、藝妓仕無い方が可いちや無いか、亭主の病氣を全治と思ふ情があるなら  
尙ほ更らちや無いか、」

「けれど、そればかりは、如何な事が有りまして、」

「ホ、、戯談ぢや無いよ、今ね、妾を影へ呼んだ牛込の子爵がね、ほら、五十回  
出してね、御亭主が病氣ださうだが、氣の毒だから遣つてくれつてね、て何だそう  
だよ。少し聞き度い事があるから、此先の吉野家ね、待合の、彼處まで来てくれつ  
てさ、確りおしよ、お前さんの爲めに成る人だよ。」

「えッ、彼の牛込の……ホ、女將さん、御親切は有りが度う御座いますか、……」

「ぢや……、」

「否、お座敷で、お酒の相手の藝なら、甚麼苦しい思ひもしますが、……  
……許して下さいね、妾にや夫が有りますし、藝妓こそして居ますが、  
操の道は知つて居ますからね、假令夫が傍に居無くつても、妾や夫婦のつもりで、



稼いで居ますんですのよ。ね、怒ら無いて……、」

「勝手におしな、戯談ぢや無い、商賣が大事と思へばこそ、爲めになるお客を周旋てあげるのだ。もう妾に恥を二度迄かゝせれば、澤山だからね、家の出入は止めて貰ひますよ。否、お断りしますよ。」

「ですがお女将さん、妾の悪い處は……、」

「ぢや、妾の頼みを聞いておくれかい、」

「……………」

「過日立て替へた金を、何とかして貰へるかね」

「……………」

「ねえ、小繁ぢやん、悪い事は云は無い、妾は黙言つてるからね、顔だけでもね……、」

「お酒のお相手なら、何度でもお相手は仕ますが、……………怎麼爲つても……」

「ほゝ、妙な妓だね、何も操を破ぶるの、何のつてえ顔を立て、貰ふのぢや無い」

よ、誰だね、妾の思ひだけでも、半込の子爵だけへはね、」

「怎麼するんですの……、」

「解つてるぢや無いか、月に六十圓宛出すから、藝妓の傍ら、お妾……と云ふのも無いが、お酒の介抱してあげるのさ、」

「えッ、厭です。そればかりは……、」

「勝手にしろッ、生意氣な、ヘッヘッ、操がなんだい、まあ、操が守れたら、守つて御覽……お目にかゝらないから、過日の金ね、早く返しておくれ、お帳場の方が困るから……、」

「……………」

ホロ／＼と、涙を滾した小繁の繁子は、儚ない身の上を想つて、幸彦の病氣の爲めと、三味線を引けるのを幸ひに、吾妻家から藝妓となつて、此柳橋で棲をとるやうに爲つたが、招ばれる料理屋、待合などに於ける。金から生じる生活の裏面、あゝ



操の眞實が、之れて果して全うされるであらうか、體を慄はせて、泣き悶え沈んだ小繁は、悄然と立ちあがつた。

同 二 小癪に障らア

「萬兵衛様居たかね」

淺草の合羽橋を、左へ行つた右側の足袋屋の二階を仰いで、藝術家と稱す溝口が長髪を暑そらに肩へ下げ、白地の浴衣の上へ、鐵納戸の羽織を着て、體に似合無い細い洋杖をついて居る。

「ハイ、誰人……やあ溝口さんですか、さあお上りなさい、恰度出かけようと思つた處です。」

「そりや宜かつた。ぢや失敬して上るか、」

足袋屋の二階へ同居して居た萬兵衛は、又繁子の事て來だ溝口を、蒼蠅……と思つたが、幾等かの金にも成らうと、澁々ながら呼びあげる。

「お暑う、突然だがね、萬兵衛さん、重大事件が起つたのだ。實に許すことの出来無い事件だ。お前さんも關係だからね、一應は話に來たのさ、」

「えッ、私に……、」

さつと、顔色をかへた萬兵衛は、虚途々々慌て出して、二階から街路を眺めたり階段へ注意する。

「萬兵衛さん、何れ警察からね、否、今にでも……、」

「ぢよ、冗談ぢや無い。驚かしこ無しさ、何も悪い事を仕やしまいし、罪な眞似しなさんな」

「罪を作つたから、仕様があるまい、」  
「何ですつて、」



「ハッハッ、何も爾う憤に成らんでも宜いし、慄へ無くも宜い、僕さへ貴方の言葉一つで、怎麼にでもするからね、何、永久に黙言つても居るさ、」

「夫りやね、貴方の知つての通り、私しや其の何で、」

「だからさ、僕さへ黙言つてりや宜いのおや無いか、」

「眞實ですかい」

「大丈夫……併し、それも、貴方の心と、僕との心との二つだからね、一體貴方は遣り方が下手だ。」

「爾うてせうか、けれど、十分注意して遣つたのだが、悪い事は出来無いね、もう知れちまつては……、」

「だからさ、下手だと云ふのだ、注意たまへ。迷誤々々すると、縛れるぜ。けれどそれもね……、」

「爾うですかい、て何ですか、私と云ふことが……、」

「未だ其處まではゆか無いがね、僕あ刑事に知人があるから、ハッハッ、大丈夫だよ。心配したまふな、」

「へえ、眞實にね、頼みますぜ、その替り。恩は忘れませんよ、必度な爲めに成る事をしますからね、」

「一體怎麼云ふ方法で遣つたのだい、」

「夫れですかい、實は斯うですよ、淺草公園を歩いてますとね、金は無し、暑いと来て居ませう、例の藤棚の中へ入りましてね、一服……と、腰へ手を廻しますと、ちよいと障つたのが彼の包み。隣りの人を見ますと、よく寝て居やせう。」

「うむ」

「悪いとは思ひましたが、四邊にや暑いものだから、扇子こそ動かして居れ、見て居るものが無いのでね、」

「ハッハッ、そこで盗つた理由だね、」



「爾うですよ、それから急いで戻つて来て、中を開けて見やすとね。折り靴の手携の中に、八圓現金が入つてやしてね、受取りがごてくありやしたが、其他の物は手拭が二本、時計が一つ、單衣物が一枚だけでしたよ。受取りは捨ちやいました品物は食べちましたよ、へッへッ、酒にね……、」

「ちやあ盗つて来たんだね、」

「へい、悪いとは思つたが、娘の奴は居ず。仕送りの無えのでね、遂ひ……出来心ですよ、」

「爾うか、成る程ね、僕あ君を、那麽人と思つちや居無かつたが、貧すりや鈍するて、恐ろしい人だ、」

「申し譯が有りやせん。何卒ね、宜ろしく内々で……、」

「言やせんがね、始めて聞いたよ、」

「へエ、」

「へエちや無い、僕は那麽事で来たのちや無い、」

「エッ、」

「他の事だ、」

「他の事つて、もう何も、」

「白ばつくれちや不可よ、僕は知つてるのだから、」

「知つてるつて、此他には……、」

「ちや警察へ僕は、一寸行つて来る。」

「エッ、あッ、まあお待ちなさい、貴方は恐ろしい人だ。其他つてえのは、人足の誘拐だけですよ、」

「人足の誘拐……北海道行の……、」

「へエ、夫れだけで……、」

「ちや云ふが、繁子さんを何處へ遣つた、」



「エッ、娘を……」

「爾うさ、僕は知つてゐるぞ。散々僕を偽して、詐欺同様に金を取り、柳橋の吾妻家と云ふ藝妓屋から藝妓に賣つたぢや無いか、それでも……」

「あッ、えッ、あの繁が、娘が、へエ、眞實ですかえ、」

「白ばつくれるな、」

「何ですつて、白ばつくれるなつて、之りや聞きものだ。知りも仕無え者に、憤られて耐るものか、何だつて娘を柳橋なんて、知りも仕無い、今始めて聞いたんだ。冗談ぢや無え、よしそれだからつて、お前さんに、憤に驚かされる筈が無え、」

「ぢや眞實に知ら無いのか、」

「當然よ、知るもんかな、怎麼りて居處が分ら無えと思つた。あの女め、太い奴だ怎麼して遣らう……」

「眞實に知ら無さやね、萬兵衛さん、少し相談があるんだが、聞いてくれまいか、」

儲け口だが……」

「儲け口なら乗るが、太い男だ。俺の娘を藝妓に賣り飛ばすなんて、憎い奴だ。娘も娘の奴だ、」

「まあ爾う怒ら無いて、相談だがね、お繁さんを怎麼だらう。お前さんが行つてさ親と云ふ権利から、引つ張つて來たら、ね、後の談判は引き受けるし、相當の禮はするぜ。三十圓ばかりね、」

「えい、もう爾う云ふ女なら、迷誤々々つきや、もつと賣り飛ばして遣ら、高く賣つて、少しは寢酒でも、」

「萬兵衛さん、ぢや何かい、お繁さんを引つ張り出して、高く賣るつもりかい、え、賣る氣だね、」

「爾うさ、何の爲めに、藝妓に成つた位は知つてまさ、亭主野郎の爲めに、大枚の金を取られやがるなら、俺あ親だ、親が賣るに差し支へが無えからね、」



「爾うか、ては怎麼だらう、一ヶ月ばかり、僕の妻として貰ひまいか、三十圓だけあげるが、」

「冗談ぢや無え、お前さんも爾うだ。藝妓で居る中こそ、威張て買ひもしようが、家へ連れて来たからには、何てお前さんの云ふ事を聞くものか、金で自由に成つてゐる女だつたら知ら無えが、知つての通りぢやあるし、お前さんの面ぢや、私だつて嫌だ、」

「何だつて、」

「何でも無いさ、嫌がる娘を、幾ら親の意見でも爾う自由にやら成ら無え、それに吝酷れやがつて、世話しろくろつて、まとめてなら兎に角。一圓だ、五十錢だつて未だ四圓二十錢つきや貰は無えぜ、それを恩にかけやがつて、小癩に障らあ、第一三十圓だつてえが、お前さんに有るけえ、」

「ハツハツ、僕を爾う侮辱するものぢや無い、何だ、三十や五十圓の金、何日でも

有らあね、」

「へッへッ、有つたらお目にかゝら無えよ、」

「爾うか、ぢやお目にかゝら無えやうに、俺は之れから警察へ行くからな、ハツハツ、まあ待つてたまへ、」

「えッ、警察……何しにてえ、」

「知れてらね、問ふに落ちずとか云つて、お繁さんをお前が、俺に周旋するつて云ひながら、黙合つて藝妓にしたかと思つてな、相談ながら鎌かけりや、聞きも仕無え事を、べらく喋口つたぢや無いか、」

「うむ、む、しまつた。ぢや彼の事ぢや無いのか、」

「ハツハツ、お氣の毒さ、」

「むし、えッ、鎌にかけられたか、」

「ぢや一寸行つてくる、」



「……おつと、まあお待ちなせい、急なくつたつて、話は出来ませぬ。爾うてせうだからさ……」

溝口に、驚されて始めて、呆氣喋言つた自己の秘密も、職業無きまゝ、出来心とは云へ、生活難の苦痛からであつても、それが許さるゝ筈が無い、あゝ知られたかと後悔の臍を噛んで、悄然としたのが、娘繁子の藝妓云々を聞いて、直覺するのは、娘を食ひ物と……浮べて、其放逸な、生活から割り出した。金銭問題が、もう溝口など眼中になく、勢ひ金を得ると云ふのに在つて、憤々と威勢を張り、三圓や五圓の端錢で、溝口に任せるよりと、怨の重複的に……流れたが、秘密の犯罪を喋言つた弱點から、溝口に、復た驚された萬兵衛は、一も二も無く、悄然として終ふ。

「ぢや、僕の相談に乗るか、」  
「え、仕方が無え、」

「ては話すがね……」

藝妓家吾妻家から、繁子を引き連れ出す方法につき、慾と色との二人が、頭を並べる處へ、下階から名刺が運ばれた『子爵大井一政』と讀んだ二人は、顔見合せて不思議さうに、下階を覗いた。そして、見る影も無い。借り室を見廻して、慌て萬兵衛は下階へ去く。

同 三

心臓を躍らせる

房州の諸山は、裾麓から霞んで、稻毛の濱へ寄す波の返すうねりを、戯るかのやうに踏み構へた。海に浮ぶ鳥居が神祕を嘯ふいてるか、磯風の香を送らせて居る。磯傳いを、新舞子の松林へ足を入れた。大葉幸彦は、強度の神經衰弱症の爲め千葉稻毛の海岸で、疲勞しきつた腦を休養しつつ、初夏の朝晴れの空に、散歩しながら、崇嚴な、漁村の鎮守淺間神社への石段を昇る。



「おや、もう御散歩ですか、」

昇つて来る。幸彦に言葉をかけて、頂上の石の鳥居傍へ立つた。二十歳前後の令嬢風なのが、供の女中を顧みて、心快さうに微笑んで居る。

「やあ、貴女こそ……」

登りきつて、拜殿へ頭を下げた幸彦は、涼しさうに吹く潮風を受けながら、海を望んで莞爾笑た。

「ホ、ホ、妾、神経が興奮すると見え、昨晚から寝られ無いですもの、それで今朝明けるを、待つて参りましたのですわ、ホ、ホ、」

「不可せんな、寝られ無いのは毒です。併し、早朝から、海岸や松林の中を散歩するのは、心氣も快いが、體に薬りてすな、」

「眞實で御座いますわね、女中なんか寝むがりてしてね、ホ、ホ、ホ、共に語るに足らんとて言ふ女で御座いますわ、ホ、ホ、朝の海邊は、耐らなく宜ろしう御座

いますわね、妾、好て……」

「あらお嬢様、随分て御座いますわ、妾寝坊なんか……」

「否、人は、大いに寝なきや不可、」

「まあ、九十九里屋のお客さん迄……」

「お花、もう此方のお見えに成つたから、お前別荘へ行つてね、御用なさい、妾……寂しくないから……」

「ハイ、畏りました。では御免遊ばせ、」

「ハア、お座敷の花を替へてお置き、」

供の女中が、駆け出すやうに、社殿の裏へ去く後姿を眺めた令嬢は、赤坂に住む伯爵山村清之助の愛娘で、辰子と云ふ肋膜を少し病だのを、稻毛の別荘の在るのを幸ひ、保養がてら來て居る。

幸彦は、亡母が臨終に際して、強度の神経衰弱より起る。發作狂の治療の爲め、



稲毛へ轉地と云ふものゝ、繁子が犠牲の金に依つてだ。恵むと云はれたのが、江戸ツ子女の擬勢？ 虚榮とでも云ふのを傷つけられたかのやうに思はれて、叩き返したが、幸彦の狂病を治す方法が無い、官費で東京府病院へ頼むのは容易いが、痛く恥しめられた感じを浮べた。幸彦の空家での出来事に對して、それが自己の權威に顧みられて、胸に浮んだのは、犠牲の二字だ。體さへ汚さねば、心からの幸彦へ對する操を、假令酒席へ出たからとて、それを守るは容易である。藝とて、腕で信じられて在る上は、藝妓と成つて、藝のみで賣るに、何の恥にも成らう。幸彦の名の汚れる事は無い、それより他に求め得られる道とて無い、金策に依る。幸彦の病氣療養手段を、吾妻家から藝妓と成つた犠牲の金として、轉地させたのだ。

轉地した幸彦は、一日と全治に向ふ病氣の過去、顧みると犠牲と？……成つた。繁子を想ひ、痛刻な苦に惱んで、煩悶するのは身の意氣地の無いのを悲しむ、『あゝ、氣の毒な、濟ない事をした。それに就いても、此病氣を、一日も早く治さ

んければ、そして、何とか方法を執り、繁子を元の體に……、噫々、研究する發動機も、一時止めねば成らず。何と云ふ不運な身の上だらう。同じ事だが、繰り返す毎に、耐らなく苦痛を深める。此胸の悲哀……吁、

吻つと、痛刻な、慘たる思ひの歎息を吐いて、松林に迷ふ幸彦は、復氣が狂ふかのやうに、慌て、憂鬱くなる胸を抱いた。

『貴方、怎麼かなすつて……』

追ふやうに、後から來た辰子は、溜息に暮れる幸彦を仰ふいて、心配さうに聞く其れを顧りみた幸彦は、寂しい微笑を浮べて、

『否、怎麼もしませんが、後からお出たのでしたか、僕少しも知らなかつたですハツハツ、』

『何か、お考への態度でしたから、御遠慮して居ましたが、餘りお苦しさを御様子なので、……』



「爾うてしたか、爾う見えましたかな、ハッハッ、遂ひ愚にもつかぬ事を考へましてね、よく御注意下さいました。有りが度う。やあ、飛行機の製作所へ来てしまひましたな、」

「眞實に、左様で御座いますわね。稻毛も、飛行機の試験所が出来ましたんで、づうつと、開けて参りました事、そして、漁村らしい面影が無く成りまして……」

「爾うてすな、併し、利器の發展して来るのは、人情觀を入れず。國家社會觀から大ひに賀して貰ひ度いですよ。表面な虚榮な底級なのより。充實された榮を望み度いですかちな、だが、未だく飛行機と發動機は幼稚なものです。鳥が空を飛べるやうに成つた如く、進化の利器を作られ度いですな、」

「被仰るまでも無く、危険の無い飛行機が製作したら、甚麼に嬉しい事てせう。妾が男だつたら、ホ、ホ、まるで空想するやうで御座いますわね、」

「が、現代は、金が先で、生活が伴はないと、折角の苦心も、水の泡ですからな、

よし研究されたものが出来ても、認められるまでは、家庭と、社會の人とを思はねばなりませんよ、生活難に追はれ、材料の缺點、家庭裡の苦、夫れ等の總てにうち克つ力があれば、立派な、完全なものが出来ませうが、併し、十分なものは、假令成功しても、出来ませんからね、激甚な生活難の現代では、作らせませんよ。材料が在れば在るで、又それに對する錯雜な懊惱がありますからな、ハッハッ、まあ何事でも、機會とに依る瞬間をとらへて……否、止ませせう。御婦人へお話しても、失禮だがお解り憎いでせうし、且つ没趣味ですからな、それよりか……」

「否、結構で御座いますわ、」

と云ひながら、二人は顔見合せて、莞爾微笑んだ。濃紫紺がかつた。單衣お召織へ、竹絞りの羽二重縞の羽織を着て、博多の夏帯を胸高に締め、歩く毎に、砂の匂あがるのを氣にしなから、蒼白い顔を俯傾がちにする。令嬢の辰子は、眞黒な濡れ羽のやうな頭髪を、女優卷きにして、鬢の亂れ毛を蒼蠅うに掻きあげて、思はず輕



い歎息を吐る。

セルの單衣に、立紹の鐵無地羽織を着て、邪魔氣に投た洋杖で、松の幹を叩き、先へくと歩き出す幸彦は、寂莫な思ひする胸も、辰子と、語り合ふのが、僅時慰さめられて、華な、力のある希望を浮べる。

「今日は何ですつてな、宿の爺さんから聞きました、東京の女學校から、稻毛へ遠足があるとか……」

「爾うて御座いますつてね、漁夫の女ばかり見る眼には、懐しい感じが致しますわね、ホ、ホ、」

「爾うかも知れませんが、」

懐しい……狂ひ度い程繁子が戀しい、彼れ故に生て居るやうな自分は、もう意氣地の無いのが、腹の裂れるより苦しい、完全な發動機に依る。自由な飛行機を製作して、國家社會への業務を盡し、天職として授習されて得た工學士の名に對しても

病氣と運命とに中途で止められた。研究を續けて見度い、稻毛を撰んで轉地のも、飛行機講習所があり。製作所を見られるから繁子には濟ぬが、病氣を押しても、諾し研究を續けよう。そして後……繁子を呼び迎へやう。國家社會への愛の爲めなら、犠牲者とした繁子を顧みまい、神は必ずしも、我々夫婦を憐みなさるであらう。

「うむ爾うしよう。病氣の爲て、浮かくと自分を忘れてしまった。あ、飛んだ事……」

「え、怎麼か……」

「やあ、之りや、ハツハツ、莫迦です、浮かり考へあまつた事を、獨言に喋言てしまいましたよ、ふツふ、」

「まあ……ホ、ホ、」

愕乎して、紅く熱る頬を押へた幸彦は病み疲れた思ひから脱したやうに、活々と成つて、體が軽く想はれ、晴々とした眼が、希望に光りゆくか、瞳に力がこもる。



「來ましたな、女生徒の姿よりは、洋傘の揃つたのが美しい、此初夏の空を色彩つて、やあ澤山の生徒だ、」

「ホ、ホ、何方の女學生でせう、」

「左様、下町ぢや無さうですな、」

稻毛驛から、能く山師が縁日へ持ち出す。色染けた蛇のやうに、道路をうねつて此松林を海氣館へ入つてゆく、それを眺めて、東京での、若い想ひをたどつて居た幸彦は、己れを忘れたか、偶然掌が温かく覺えたので、思はず握る氣もなく握ると愕然して手を擴げた。

「まあ……、」

「いや、怎麼も……、」

顔見合た二人は、對き合ふさへ心苦しそくに、熱く眞赤に染めた双頬を斜向けて心臟を躍らせる。

「貴方、若し、幸彦様、幸彦様ぢや在りませんか、」

「えッ、む、清子さんか、」

名を呼ばれて、我れに返つた幸彦は、後を振り返つて怪嫌の眼を睜り、驚然して二三步後へ退る。

「矢つ張爾うてしたね。之れて二度、不思議な處でお目にかゝりますわね、ホ、何日もお變りも無く……」

「否、有りが度う。」

「あの、稻毛へはお遊びにても、それとも伺へば、飛行機の御研究を爲さるとか……、それで……、」

「ハッ、ハッ何で僕のやうな者が、飛行機などと、無智、無學に、出来るものですか、少し體が悪いものですから、轉地して來たのです、」

「左様で居らつしやいますか、少しも知りませんで、失禮な言申しあげました。お



體の悪いのは不可ませんね、て、もういくらか……お宜ろしいのですか、」

「えい、お蔭でね……」

「それは何よりて、彼の此方の御婦人は、奥様で……」

「失禮な事云ふては困る。山村伯爵の御令嬢です、」

「あら、それは飛んだ失禮を、御免遊ばせ、妾は大鈴清と申しまして、此方に在らつしやいます。大葉幸彦様の知り合ひで……今日は教へて居ります女學生と参りましたので、怎麼もお樂みのお邪魔を……」

「清子さん。何を云ふのです。以前は知り……、否、何てあらうと、今日では赤の他人です。没常識ことを云ふちや困る。お、爾うだ。僕は、用の有る體だ。御令嬢怎麼も失禮しました。又……」

「否、妾こそ……」

「若し、お二人とも、爾うお逃げ遊ばさないでも宜ろしう御座いますよ。お邪魔し

た妾が悪いのですから、」

「清子さん、没常識こと云ふて、人を見て仰しやい、」

「えい、見たから申しあげたので、」

「何ですつて、」

「爾うてせう。お睦じく、お手をお執りに成つて在らつしやればね、何とでも見ますよ、」

「若し、貴女……」

「否、お待ちなさい、僕が言ひます、」

と、何か云はふとした、辰子を後へかこつて、ぐつと睨みつけた幸彦は、慄へる唇を破るやうに開けて、

「莫迦ッ、失敬なッ」

「ホ、ホ、御立腹ですか、可愛の女房を藝妓にして……」



「藝妓……、ひい、」  
敷石を傳つて、松の木の間へチラと隠れた。藝妓が、凝乎立つて、此方を熟視て蒼白な顔して居る。

同 四 舌を噛むでも

「ホ、ホ、飛んだ言申しましたわね、繁子さんとか申しましたつけ、彼の奥様のお名が、唯今は柳橋の藝妓で、小繁と云ふ流行妓、大井子爵の御寵愛を蒙むつてとか貞操を論じるのは、夫婦として同棲する中だけで、貴方も貴方なら奥様もホ、ホ」  
「お黙言なさい、失ッ失敬な、貴女は、僕を侮辱するのですか、無垢な令嬢を傷をつけ、あまつさへ僕……」

「ホ、否、侮辱なんて致すものですか、唯だ在りのまゝをお話し致したんで、お

氣に障りましたら、お許し遊ばせ、お、暑い、おや汗が出て、」

半巾を袖から取り出して、頸の邊りから、額を拭き、冷やかな笑を見せて、何か未だ言はふとする。

「大葉様、妾、心持が悪く成りましたから……」

清子に、罵られた辰子は、ホロリと涙を落し、口惜そうに、幸彦を仰いで、眼を伏せる。

「爾うですか、夫れは不可ませんな、さあ、御遠慮無しに、お戻り下さい、此御婦人は、少し逆上して居るらしいですから、尙ほ失禮な事が在つては……」

「何ですつて、逆上して居ますつて、まあ、暑いから逆上もするてせうが、お二人の仲に、何で……」

「貴方もお戻り遊ばせ、お體へ……」

「ハア、戻りませう。」



「ホ、ホ、お二人で、まあ何處へてもお戻り遊ばせ、女房は藝妓に成り、子供は放り出されて、病氣に……」

「え、ッ、聞いて居れば、失ッ敬な……」

「まあ、彼のお顔、お、恐い、誰人を睨ひんです。」

「貞操を踏みにじらせて迄、幸彦を救はふとする。精神的の愛で無い、物質の愛に満足する藝妓と、數年間夫との貞操を守つて、獨身生活をする女教師と、何方が美しいてせう。病氣の苦を助けられても、精神的に愛を殺した藝妓の女房……、奥様と……」

「御免下さいませ、若し、貴郎、何して居らつしやるのです。轉地した甲斐も無いお體を悪く成さるぢや有りませんか、歸りませうや、」

「やあお前……」

「お前ぢや在りませぬ。貴郎が、愚圖々々此様人を相手に成さるから、藝妓々々ッ

て、憎らしい、云はれるんぢや在りませぬか、聞いてれば、子爵の大井様が、怎麼かしたとかつて又、藝妓の貞操論、ホ、ホ、冗談ぢや無い、體汚しても、心の操を汚さなければ、操が守れるんぢや在りませぬよ、夫と定めて在る以上は、體まで夫のものです。妾やね、藝妓して藝こそ賣るが、物質の虚榮を得やうとか、幸彦の病氣を治さうとかの爲めに、體を汚してまで、甘心を買ふ女ぢや有りませぬよ、お氣の毒だがね、子爵が何だい、金が怎麼したんだい、肩書や金で、此大事な操の紐を解く藝妓ぢや有りませぬよ、注意してものを仰しやい、」

「これ繁ッ、」

「まあ黙言つて在つしやい、散々貴郎を莫迦にしてさ、聞いて居る女房の身に成つて御覽なさい……、貴郎も悪いのだ、何處の馬の骨の華族か知ら無いが、那麼令嬢と連れだつてるからよ、貴郎にや、妾と云ふ妻があるぢや無いの……」

「失禮な事、云ふぢや不可、」



「何が失禮です。貴郎は何と云ひました、俺は華族が大嫌ひだ。父祖の糞つ功で生て居る……」

「ホ、ホ、ホ、まあ、之れて胸のつかへが下がつた。どれ、失禮ませう、御緩りお喧嘩遊ばせ、ホ、ホ、」

「何云やがるんだい、懶惰女教員め、え、ッ、貴郎が悪いばつかしに、く、口惜いッ……たら……」

「之れ、何處へ行く……」

「何處だつて、彼の女……」

「まあ待て、僕が悪いのだ。な、お前のお蔭で、これ御覽、體が治つて來たぞ。之れから……」

「あら、まあ嬉しい、快く成りましたわね、妾の苦勞した甲斐も在りますのね、ぢや、未だ此令嬢が……」

「これ、失禮な言申しちや成らん、毎日、僕の寂莫い心を慰めて下さる、伯爵の御令嬢ぢや無いか、御令嬢、お氣にかけ無いて下さい、此女は、僕の最愛の妻なのです。何卒宜ろしく……」

「左様で御座いますか、妾こそお世話に成ります。あの少し用事も在りますから、之れて……」

「左様ですか、さあ御遠慮なしに、失禮しました。」

頭を下げて、ソツト幸彦を仰いだ辰子は、思ひ返したやうに、淺間社の方へ去かうとする時、傍らの松の木影から出て、慌てたやうに……

…松山を駈け下りて去く清子は、幸彦の妻の來たので、多少間の悪い思ひをしたが反つて、或る妬みの野心に勝つた誇を喜んで、女生徒の待つ海氣館へ戻つたが、未だ残つて居るやうな思ひが、妬んだ心の底へ、不安らしい響きを與へて居る。

社會觀の、未だ眼鏡も知らぬ、伯爵令嬢の辰子は、何浮べてか、涙の溢る顔



面を袖に押へて、小松原の砂に足とられながら、松林の奥まつた。別荘へ駈け出して去く。

「困るね、お前にも……、おや、泣いてるね、何が悲しいのだ。泣く事があるかい 怎麼したと云ふのだ。」

「……知りません。」

「らむ爾うか、お前は、誤解して居るらしいぞ。」

「何が誤解です。人の氣も知ら無いで、誤解も縁階も在るものか、少しは妾をお考へなさいな。」

「む……、繁ッ、僕はお前と別れよう。」

「えッ、何ですつて、」

「別れようと云ふのだ、夫婦の縁を切らうとするのだ。」

「……貴郎はねえ……」

「何が貴郎だ。夫と思へばこそ、斯うも世話するんだらう。他人なら誰人だとして、斯う迄世話は出来無い筈だ。爾うだらう。して見れば、夫を信じ、自己を省みればこそ、犠牲にも成るのだ。それが、何の真似をする。心まで賤しい女になつたか、其態度は何だ。朱に交はれば赤く成るとか、お前は、此俺を、斯れだけにして、世話するのを、威らいものと思つて、恩に懸けるのだな、否、爾うだ、夫れに相違ない、さも無くば。僕の此丈夫に成つた姿を見れば縋りついて、自己を忘れてまで、喜ぶ筈だぞ。」

「……………」

「餘り恩にかけたり、誤解するものぢや無い、自己の心さへ信じて居たなら、美しい愛と云ふものが、其處へ生れて来る。僕は、丈夫に成つた體を考へると、寧ろ狂人て居た方が可い、常識の無い人等の中へ伍して、仙人のやうな生を送り度いよ。」

「……………」



「お前が、用の多い體にも拘らず。斯う來て慰めるのを、樂みにして居た。人に知れ無い寂莫の悲しい運命を抱いて居る身には、お前ばかりが頼りなれた。頼るお前が、危険な言葉、態度を示すのは、もうお前と云ふ女の弱點が表れたのだ。愛する夫の爲めに、身……ぢや無い、藝を犠牲にして、盡す誠心が、何日か眼に浮ぶ恩てふ念、夫を救つた……と云ふのが、在り／＼と心の底に見える。」

「貴郎……」

「自分と云ふもののみ見て居ると、其隙に乗ずる。危険な魔の手が、お前の體すべを抱へて終つて、折角の貞操が、誘惑の戯れと成るのだ。」

「若し……」

「さあ、別れてくれ、もうお前の體は、汚れたも同様だよ。否、貞操を論ずる僕が悪いのだ。」

「妾、那麼つもりで言つたのぢや無いのよ、貴郎が大事だから、妬もするんだわ、

貴郎、妾が悪……」

「お前が悪いのぢや無い、意氣地の無い僕が、お前から疑られる事を仕たのだ。僕に……確たる意識と堅實な腕がありや、お前にまで苦勞もかけや……仕無い、噫呼何故自分は……」

「貴郎、妾が悪いのです、許して下さい、もう／＼甚麼事が在らうと、決して御心配かけやしません。お氣を直してね、か勘忍して……」

「否、詫まる事は無い、もうお前の心は、既に、魔の手に障られかけて居る。それも僕が悪いからだ。」

「否、那麼事は在りやしません。假令あらうと、妾の心は大丈夫ですわ、何て體を汚しませう。妾の體は貴郎のものです。體ばかりぢや無い、總てが貴郎のものですもの、何で自分勝手な事するものですか、ね、氣を直して、ね、貴郎、藝妓にも意氣地の張りは在りますわよ、況て、幸彦と云ふ夫のある妾、意氣地の操が危険にな



つたら。舌を嚙んでも、誠の心を見せますわ、否、必度御覽に入れます……。」

「繁ッ、お前は、其言葉を誠心で云ふのだらうね、」

「え、虚で云へるものですか、」

「うむ、有りが度い、よし其れが虚であつても、僕に對する操を守つてると聞けば、愚な僕でも、嬉しいと厚く謝するよ。」

「あれ、疑つて在つしやる?、」

「否、疑りやせん。僕は男だ。幸ひ體も丈夫になつたし、之れから爲さねば成らぬ事業がある。お前の心を信じるやうに、安心して僕の心も信じてくれ、没情事から双互の誤解を生むと、其れが痴情に成り。折角の事業も、お前の厚意も水泡に成るからね、」

「え、妾、貴郎を信じて居るわ、安心して居ますわよ、貴郎、事業をお始めに成つて……。」

「うむ、折角あれだけに苦心したのだから、彼の儘放つとくに忍びんものな、幸ひ體も元に復して來たもの、彼れが夫婦の生命だ。死すとも成功させずに置くものか、お前も苦しいだらうが、暫時の辛抱だ。よし、之れが永久の事業で在つて、成功せずとも、夫婦の心の變ら無い記念を、社會へ呈さうよ、美しい愛のしるしをね、」

「貴郎、嬉しいわ。何卒成功してね、一日も早く妾を元のお側へ呼び下さいな、それ迄は、怎麼苦しい思ひしても、妾待つてるわ、そして、毎朝お參詣に行く度び神様へ、貴郎の事業が御成功するやうと、拜みますわよ。」

「繁、お前は、それ程まで、僕を思つてくれるのか、」

「え、貴郎は妾の大事な夫よ。」

「む、お前は妻だ。」

「え、嬉しい、」

「繁……、遅く成りやせんかい、戻るのが、」



「遅く成らうと、體まで賣つた體ぢや有りません。」

「む、濟ないね、」

「何てすね、貴郎が濟ないと思つたら、一日も早く成功して、妾を呼ぶやうに仕て下さいな、」

「仕無いて置くものか、」

「嬉しいわ、屹度よ。」

「うむ、それまでは、辛抱してくれ、」

「え、辛抱しますわ、それで無くとも、苦、苦しい思ひして居ますつよ。輩胞には悪戯られ、お茶屋さんからは憎まられてね、妾……主人にや睨れるし、もうく立つ瀬も無いのよ。毎日々々泣いてるわ、」

ソツト、涙を拭つて、膝の邊りをボンと叩き、盪乎と立つて、四邊を見廻すと、突然幸彦の胸に縋つて、ヨ、と泣きじやくる。

「許してくれ、僕の體が……え、つ、きつ、屹度成功させて、お前の體を、明みへ出さずに置ものか、莫迦な、價が相手は身分の無い賤業者だ、繁子、氣にかけるな未來を樂むで、何事も眼を眠つてくれな、頼むぞ、見返しは、必度させて遣る……。」

「貴郎、濟ません……。」

「泣くな、さア、宿へ戻ろう。折角お前の體が治つて、僕は嬉しいと思へば、此度は僕の體が悪くなり、斯ふやつて癒りかけたのだから、お前にも病はれては、もう總てが水泡に歸して終ふ、な、泣いてくれるな。お前に泣かれると、僕の苦が増すぞ、」

「え、泣きません。泣くものですか、濟ませませんでした。宿へ参りませう。久しく貴郎の肩揉ませんてしたから、肩でも揉んで東京へ戻りませう。」

「うむ、爾ふしてくれ、僕も、久しぶりで、お前の……。」

「え、疲たわね、」



「病氣だつたもの、肥つた日には……」

「ホ、ホ、爾うてしたわね、」

「お前も瘦たぞ。」

夫婦は、寄るともなく添ひ連れて、松から松の林を抜け、浅間神社の下を過て、鳥居を横に海磯へ出る。

「あれ、波が……」

「濡らすな、」

顔見合せて、莞爾微笑むだ夫婦は、堅確と寄り添うて去く後姿を、凝乎怨めしげに眺めた女が、二人ともに、云い合さねど、堅く唇るを噛むだ。

単衣の道行を疊むて、するりと長く引く着衣の裾を、夏帯に挟むて、下から艶な長襦袢が、繁子の足にからみつくと、軽く蹴いて、離れじと、幸彦に縋り添ふのが耐らなく漁村の氣を唆つて、嫉妬の的になる夫婦の歩む影に、波が寄せて、夕磯風

が、沖遠く吹いてゆく。

夏の月

一 不見轉が相應だ

新築に建家られた。向島の百花園内の二階座敷へ招ばれて、俤で駈けつけた小繁の座敷へ通る頃には、杯盤狼藉とても云ふ光景で、先へ来た藝妓の丸子やお鯉は、頬を酒に染て、半玉の豆子を相手に、拳を打て居る。

「よう来たな、待つてたぞ。子爵、参りました。お待ち兼の優物、戀しい君様、いようッ……」

「今晚あり……あら姉妓さん濟ません。」

昵乎、横に睨むて、手を叩いて囃す男の前を過ぎて、丸子の傍へ坐つた小繁は、腰へ結むた帯の邊りを撫てて、偶然床の間を脊にした。大井子爵の傍を眺めて、



「呀ッ……」

と腰を浮した。それを逐ひ覆せるやうに、身を起した子爵の傍の男は、急速も小繁の腕を捕へて、逃げかゝるのを押へ、酒臭い息をはづませて、

「お繁ッ、汝はな……」

「呀れつ、お父様、何するむだよ。」

「何んでも無えや、やいつ、汝は誰人の許しを受けて、藝妓になんか成りやがった俺あな、藝妓にするつて生や仕無えぞ、汝う、能くも親を足蹴にしやがったな、ど怎麼するか……」

「お止しつたら、何するむだよ、藝妓に成らうが成るまいが、妾が好て成つたんだから……」

「何だつて、自分が好て爲つた。やいつ、五體満足に育てられたのは、誰人のお影だ。えおいつ、親あ莫迦にしやがると、承知仕無えぞ、」

「何を莫迦にしましたよ。冗談ぢや無い、お父様、能くものをお考へなさい、貴父のお蔭でね、幸彦は、甚麼苦しい想ひをしたか、去年無理に借りて去つたお金は、怎麼したんですかね、人間の皮覆つて居たなら、妾に斯ふ云へた義理ぢやありません、すまい、十三四歳の時から、貴父の爲めに、苦勞仕續けぢや在りませんか、それを何です、餘り親顔はなさるな、」

「え、つ、此畜生、汝……」

掴む腕を前へ引いて、坐つた儘横へ倒し、立ちあがると突如足を揚げて蹴りつけやうとする途端、

「何する。傷俄でも仕たら不可ぢや無いか、まあ彼方へ行つて、小繁、何處か痛みやせんかな、」

倒れた體を、起しかけた子爵の大井を、振り拂つて起きあがり、亂れた前を直しながら、



「何なさるんですよ。止して下さい、妾の體は、夫のものですからね、叱られますつたら、」

「何だと……」

「まあ萬兵衛、爾う怒るものぢや無い、夫の爲めに、其身を犠牲にしてまでも、斯ふやつて居る。貞女とも云ふ可き女だ。お前が親なら賞めて遣らにや不可のだ。まあ彼方に行つとれ、ハツハツ、小繁、さあ、酌でも仕て貰ふかな、此方へ來たら……」

「お酌……、お酌なら仕てもあげませうが、冗談したら承知しませんよ。斷つときますから……」

「ハツハツ、大分思にかけるなら。まあ可い、おつと。自棄なお酌ぢや、ハツハツ甘味いなう。一杯あげやうか、さあ、受けてくれ、思ひ差しぢや、」

「厭ですよ。藝妓が違ひます。面白も無い、」

「ハ、ハ、厭か、強い謝絶ぢやな、」

「おいッ、お繁ッ、子爵様へ、恥をかゝせるのか、」

「何ですつて、お父様、妾に夫のあるのを、知ら無い事は在りますまい、恥かゝせるつて云ふのは、操を破れつて、云はないばかりよ。お父様、人の道は……」

「何ぬかしやがるんてい、人の道もへちまも在るものかい、俺あ親だぜ。おい、大事な親だぜ、」

「大事な親と思へばこそ、今迄無理も通してあげたんだよ。親だ親だつて、貴父ばかりが親ぢや無い、お母様も在るんだよ。それ程親の風が吹かしたけりや、おッ母様を傍へ呼んでからお言よ。」

「え、つ、親にまで恥かゝせやがるな……」

「これ萬兵衛、捨て、置け、ハツハツ、まあ宜しく、」

「へい、けれど、娘の癖にしやがつて、餘り親を……」

「まあ宜い、今夜少し體の工合でも悪いのぢやらう。」



「幾千體が悪いからつて、親を……」

「いようつ、親莫迦ちやくりんてげすか、今晚あ……」

「誰人か、うむ、幫間の蝶八か、」

「へい、御免を、いようつ、丸子姉妓さん、お鯉ちゃんも、やあ豆坊、ほう、貞女の小繁さん、へッへッ、」

縁で坐り込んだ。幫間の蝶八は、座敷へ居膝込みながら、扇子で月並の額を叩いて、ひとり悦に入ってる。

「こらつ、幫間ッ、」

「へーイッ、あつ、三太夫の木村さんてげすか、脅しちや不可ません。夜更に蟲が出ますぜ、」

寝轉ひて、開せず焉と云ふやうな顔して、眼を眠むりながら、丸子やお鯉を相手にして居た。鐵材株式會社の發起人木村得藏は、幫間の來たのを幸ひ、開けた座を

直すつもりか、呵々大笑して囃騷出す。

「ハッハッ、夜半の蟲つてえのは、未だ見ないが、怎麼だ、骨折り甲斐に、見せちや貰へんかな、」

「へい、そりや……へい、珍祕と申しやしてな、事容易ならざる。えへん、不可思議でな、學ばされども出ると申しやしてな、へい、天機洩す可からざる、珍祕で御座いますよ。若し、強つて御覽に成り度けりや、今夜之れからお供しやしてな、例の仲へ参りやせば、お手を取つて御覽に供しますよ。へッへッ」

「厭だよ。蝶八つあんは又、眞面目で聞く木村様も無いものだ。それよりか、何かお遣りなさいな、お心意氣でもね、小繁ちゃん。さあ三味線を……」

「いよつ、待つてました。ちや一つ、お、爾うだ。小繁さんに、雨しよぼても……へッへッ、ね、」

「爾うね、夫れが可い、若し小繁さん、雨しよぼだよ。」



「踊るんですか」

「知れてらあね、怎麼せ段物よりは……」

「爾うよ、端唄だつて……」

「妾、未だ小繁さんの踊りは……」

「何卒ね、頼みやすぜ、後には斯く申す蝶八が、引き退がつて見物な仕まつる程に念なうお始めなされ、」

「姉妓さん、半玉が酔やしまひし、餘り窘めないで下さいな、他の何か……、ね、何うせ端唄だつて、満足には踊れ無いが、でも、雨しよぼよりはましよ。」

「へえ、雨しよぼが、あの踊れ無いつて、それはお氣の毒でげすな、宜うがす、それなら……」

「あゝこらつ、餘計な出過するな、控へとれ、」

「へーい、ほら御覽なさいな、小繁さんのお蔭で、閉門と來やしたぜ、何卒ね、閉

門が取れますやうに、何分一つ頼みますぜ。いようつ、待つてました。之れよりは太夫身支度とゝのひますれば、一手専賣特許を持ちましたる。吾妻家の抱へ藝妓、小繁太夫が、雨しよぼのお踊りと御座い、ほらよ、下座だく、」

「あれつ、ま待つて下さい、いくら藝妓稼業だつて、那麼に藝を戲弄ばなくも可いでせう。」

「生意氣な言云ふな、黙言つて踊れ、藝妓風情が……」

「眞實だよ。小繁ちゃん、餘り大きな口利くものぢや無いよ。少しは妾等の前も在るからね、」

「……………」

「新參の癖に生意氣だよ。雨しよぼが踊れなくつて、藝妓になれるかい、冗談ぢや無い、不見轉が相應だ、」

「……姉妓さん。不見轉とは強いてせう。妾や藝こそ賣れ、肉の切り賣りは仕無い



のですから、」

「何だつて、藝を賣る。へいん、莫迦にしないよ。藝を賣るなら、雨しよぼが、踊れる筈だよ。否さ、雨しよぼが相應だ、へつへつ、他の段物が踊れる位なら、無理なお頼みは仕無いよ。」

「……、姉妓さん、妾、踊つて見せるわ、」

「ほ、ほ、似合つた雨しよぼかい、」

「否、雨しよぼや何かの、没常識のでなくば、何でも踊るわ、姉妓さん達のお好きなのを……」

「え、踊る……、ふ、ふ、ふ、ステ、コぢや無いよ。」

「姉妓さん、貴女酔つて居てね、餘り此小繁に、恥か、せるものぢや有りませんわよ。之れでも失禮ですが、藤間ぢや名まで貰つて居てよ、安い藝ぢや無いのですからね、少し氣をつけて……」

「生意氣な事も云で無い、吾妻家ぢや藝の無い女は抱かへ無いのですからね、お前さんこそ注意よ、」

「それなら少しやお考へなさいな、柳橋の藝妓が、知ら無い土地へ来て、最初から雨しよぼを踊つて居たと云はれたら、名をれになるのを知らないんですかえ、」

「何云つてやがるんだい、お前さんには、雨しよぼ位の踊りつきや舞へまいと思つてさ、親切に踊らせて遣るんだ。有りが度いと思いなさい、」

「ほ、ほ、まあ御親切ね、其の御親切があるなら、鐘供養の地でも彈て貰ひませうかね、娘道成寺をね、さもなきや時雨西行か、もつと容易い處で、賤はたでも頼みませうか、さあ、お好なのを頼みますよ、」

「勝手にしやがれ、」

「ほ、ほ、姉妓さん風を吹かしなさんな、態あ見やがれ、端唄の一二つ彈やがつて大きな顔しやがるな、斯う云はれたのが口惜けりや、長唄でも常盤津でも、六ヶ敷



程お習ひなるから、三味線でも踊りでも、競つくらを仕ませうかね、少しは柳橋に居るんなら、柳橋藝妓の意氣地でも、見せやうぢやありませんか、」

「……………」

「怎麼したんだい、丸子姉妓さん、妾や藝妓にや成つたが、今時の應來藝妓ぢや無いんだよ。否さ、心まで藝妓にや成らないんだ。」

「こら止せ、止さんか、」

「止せつてかい、おいお髭さん、華族の殿様が、威らひか知らないが、此小繁はね意氣地の張りて持つてるんだ。金や威勢で自由にしようとしたつて、妾にや可愛い夫が持つてるんだよ。お尻の穴へても指を突つ込んで。よく臭いと相談するが宜い、」

「何んだと、」

「何が怎麼したんだい、餘りお客面するない、」

「やいつ、お繁ッ……………」

「おやお父様かい、恰度可い、能くね、人の道をお歩きなさい、貴父の爲めに、泣いてるものが在るんだよ、」

「洒落臭い事……………」

「ほ、ほ、間拔面が揃つてやがる。折角計畫だのも、お氣の毒様だつたね、妾にや神様や、夫が守つてくれるんだよ。ほ、ほ、操の尊いのを知るがい、」

「言はして置けば……………」

「まあ待て、小繁、爾う憤にならんで、他の男女達は捨て置き、まあ此方へ來い、爾うだ、酌でも……………」

「厭だよ。此小繁は、大事な操を偽して戲ばふとする人等にお酌處か、もうお目にかゝるのも嫌だ、」

「まあ爾う云はんで、私に免じてな……………」

「執拗ね、蒼蠅華族さんだ。妾や之れで御免をしますよ。怎麼もお氣の毒様、左様



なら、」

呀つと、呆氣にとられる人等を後に、衝つと座敷を抜けて、狼狽て止めるのを振り切り、急いで俥に乗るや、隅田川堤を川風に吹かれて走らせる。

同二 汝の咽喉笛へ

薄墨で、刷たやうな夜の空へ、濃黒色で畫いた待乳山を眺めて、隅田川の瀬のせせらぎを耳にしながら、ひた走りに奔らせる。俥上の小繁は、牛天神を陰に拜じて三圍稻荷の鳥居前まで來ると、動搖ばかりに俥が止まつて、後へ二三間退つて終つた。

「あれ、俥屋さん、怎麼したんだい、」

「へい、な何しやがるてい、注意無え、提灯が見え無えのかい、冗談ぢあ無え、驚

かしなさんな、」

「はッはッ、驚いたか、」

「何だつて、」

隙乎見る夜目に、櫻樹の蔭から、のつそり出た帽子真深の男が、俥の楫棒を掴むて、「おい車夫、悪い事は云は無い、楫棒を下ろして、車の女を此處へ出せ、愚圖々々せずに、下ろしちまへ、」

「冗談言かしやがるな、何處の誰人だか知ら無えが、古風な真似は仕なさんな、未だ宵の端だぜ、」

「えい、つ、黙言つて楫を下げる、」

「危無え、止せつ、邪魔しやがるな、」

「官し、我輩の云ふ事聞かぬと、それ、命が無いぞ。之れが見え無えか、ほら、短銃だぞ、」



「何だ、短銃だ。呀つ、ぢよ、冗談するな、」

「冗談ぢや無い、音がすると、命が煙に成るんだ。」

「へい、まあお待ちなせい、藝妓さん、怎麼しやせう、」

「何だか知ら無いが、薄氣味の悪い、此堤でさ。晝間なら兎に角、夜にね、人違ぢや無いの……、」

「さあ、君し、人違ぢやありやせんか、」

「人違ぢや無い、柳橋の藝妓で、小繁と云ふ、此車上の藝妓に用があるんだ。早くしろ、」

「へい、人違ぢや……」

「妾の名を知つてるのだから、よもや人違ぢや在るまいが、何の御用なんだか、まあ車夫さん、車を下ろして下さいな、お前さんに迷惑かけても濟まないから、」

「へい、宜ろしう御座いますか、」

「心配おしてない、向島の堤は、昔しなら知らぬ事、現在は開けて居らね、交番も直近くだし……」

「爾うですかへ、」

楫棒を下ろして、膝掛を取ると、褌を執つた小繁は、眞深く帽子を冠つた。男の前に立つて、

「若し、小繁と云ふ藝妓は妾ですが、何の御用か知りませんがね、此堤は往來、それに夜の事だし、家まで来ては怎麼てせう。」

「莫加云へ、汝の家まで行く位なら、此處までは出張るものか、さあ俺と一緒に來ろ。」

「何するんだい、」

無圖と掴まれた手を、振り拂つた小繁は、慄へる體へ擬勢を示して、後の車を楯にする。



「ハッ／＼、自太葉叩するな、爲めに成らんぞ、」  
 「爲めに成つても成らんども、妾の體あ自由にやさせませんよ。冗談すると、聲をあげて人を呼ぶよ。」

「ハッ／＼、呼べ／＼、聲が最期で、此短銃の音がするぞ。おい、死ぬんだぞ。可愛い男と死別れだぜ、」

「殺す。ほい、殺して貰ひませう。殺されりや本望だ、どうせ一度は死ぬだからね、ホ、ホ、没常識眞似されるより、殺された方がね、可愛い男へ心中だてさ、解つたかへ、」

「えい、此奴が……」

「さあお打ちよ。打たないか、おい車夫さん。源ちゃん、お前さん濟ないがね、巡查さん呼んで来ておくれ。出齒龜が出たつてね、早くさ、」

「へい、大丈夫ですか……、ちや行つて……」

「こらつ、待て、其處動くと一發だぞ、」

「えつ、呀ッ、まあ、待ちなせい、困るなあ、」

「えい、意氣地の無い車夫さんだ。行つてお出つたら、」

「おいつ、小繁、文句言はずに俺と来い、さあ来いッ、」

再度び寄つて、小繁の腕を掴むと、三圍社内の方へ連れ行ふとする。それを行まじと、身を悶搔た小繁は、突然男の手に喰ひつき、

「えい、何しやがるんだい、」

「あつ、あつ、痛い、痛い、」

「汝の痛のより。妾の腕が痛かつた。此度握つて見やがれ、汝の咽喉笛へ喰らひつくから……」

「はつはつ、是非喰らいついて貰ひ度いね、」

「勝手にしやがれ、車夫さん、早くだよ。」



車夫に言葉をかけて、突然身を翻へした小繁は、下駄脱さへ遅しと、二三間先へ駆け出すを、

「やつ、逃やがるな、うむ、もう之れ迄だ、」

後姿追ひかけた男は、何時か十四五間で逐ひつき、厭がつて少ほ遁やうとする、小繁の口へ手をかける、

「うわつ、痛つ、あつ、痛つ、は、放せ、痛いつ、え、放せ無えか、放さ……痛つ斯ふして……」

小繁の島田髻を掴んで、後へ引かふとしたが、

「うつつ、痛つ、放してくれ、痛えつたら、あつ、あつ、痛つ、わつつ痛つ、は、放せつたら、うわつ、」

「態あ見やがれ、没常識事するからだ。女見てしやがれ、妻にや神様と、夫のがついでるのだよ、」

「え、痛つ、痛え事しやがる、指がもげかゝりやがつたと見え、お、血が……能し、もう……」

指の痛さを押へて居た男は、逃げかゝつた小繁を見るより、躍りかゝつて後姿から抱きつけば、

「あれつ、な、何しやがるんだよ。誰れか来て、助けて下さい、人……殺しつ、助けてつ、」

「え、怒鳴なつ、」

「わつ、あつ、た……あ……け……」

小繁の叫ぶ口へ、手拭やうのもので押へ、横抱へにして、三圍神社の方へ、引きずるやうに連れて行く。

「え、自打葉叩騒ぎやがるな。重くつてしやうがねえ、えつ、此ん畜生め、動くと斯うするぞ。」



破れた島田鬻の根を、きり／＼と引つ張り、腕へ巻きつけながら、堤を降りかかる。

「こらッ、何しちよる、」

小繁を抱へた男の腕を押へた。髻深い男が、烏打帽の下から、眼を光らせて、睨みつける。

「えッ、やあ、邪魔するな、貧乏書生め、命が無えぞ。それ短銃だぞ、音のする短銃だ。」

島田鬻を掴むだ。其手を放して、懐中から出した短銃を、小倉袴穿いた、髻深い男の胸に衝きつける。

「何ぢや、短銃ぢや、ふゝ、莫迦め、我輩が打てるか、」

「何、打て無え、よし、邪魔すりや此通りだ。あいつ、誰人か来てくれ、邪魔が出た。早く自動車を……」

「やあ、自動車を持つて、此女を拐ふのぢやな、うむ、憎い奴ぢや、もう許せん。えッ、」

「わッ、」

と云ふ聲と共に、小繁を前へ投げ出したまゝ、二三間彼方へ飛んで、平伏つてしまふ。それを愉快さうに眺めた髻の男は、倒れて居る小繁を抱起し、口の手拭ひを解いて遣りながら、

「何處も、傷俄はなかつたかな、危ない處ぢやつた。」

「怎麼もすみません、危ない處を、有りが度う御座います。お蔭様で、助かりました御座います、」

着衣の塵を拂つて、亂れた前を直しながら、禮を嬉しさうに云うた小繁は、投げ出された男を見るより、

「あれ、お前さんは溝口さんだね、まあ……」



「えッ、顔しられたら、むッ、短銃を……」

「はッはッ、打つつもりか、此處に在るぞ、」

「汝ッ、覺悟をしろッ、」

投げられた時、何處へか飛び失なつたか、帽子の無い溝口は、ぐるぐると巻きあげた長髪が亂れて、物凄い顔になり、怒號するやうな聲を出して、髯の男に組みついて来る。

「はッはッ、まだ痛い思ひをせんな、よしッ、之れでもかッ、えいッ、うぬ……」

「わあッ、痛い、」

鳥居傍の、田のやうな沼の中へ、どぶりッ、砂ぶツとばかり、水音高く投げ込まれてしまつた。

「それ、飛び込んだ蟲だぞ。早く上つて来い、此度は隅田川だ。はッはッ、沼の泥に足とられて居ると見え、はッはッ、上られんと見えるな、愉快な男だ。まあ〜

緩り其處で涼みながら、遊ぶが宜い、はッはッ、這ひ上つたな。む、逃げる〜  
さあ女の人……、ははあ藝妓だな、」

「はい、誠に有りが度う御座いました。お蔭で命拾ひ致しまして、何とお禮申して宜いやら……」

「何、禮にや及ばん、心配するな、復没常識男が出ると不可んから、早く歸れ、早く……」

「はい、ては失禮致しますが、お姓名とお住ひを……」

「僕のか、はッはッ、莫迦云ふな。姓名を云ふやうな身分ぢや無い、早く戻れ〜  
汝の爲めだ、」

「はい、お言葉は有りが度う御座いますが、お姓名を承はりませんと、何れ此事を、夫へ話ますから、」

「何、夫へ話す、はッはッ、爾うか、ぢや話して遣らう。我輩は天下の浪人と云ふ



者だ、

「まあ、ほ、ほ、御冗談を……爾うて御座いましたわね、ほ、ほ、妾は柳橋の吾妻家に居ります、小繁と云ふ藝妓で御座います。何卒宜しく、して貴方様は……あれ、三原様ぢや……」

「うむッ、やあ、幸彦君の妻君ぢやつたか……」

不審さうに、小繁の藝妓姿を眺めて、言葉を續ける。

「失禮だが、見れば貴女は藝妓……、して幸彦君は、」

「はい、幸彦は……」

學校以來の友で、三原さへ早く來京居たなら、自分ばかりぢや無い、幸彦とて、斯うも悲惨な苦に悩むまいもの……をと、出さじとする涙が、過去現在の光景を寫して、悲痛の苦に、耐らなく、溢れ出るのを拭ふのみで、言葉が出無い。

「幸彦君が怎樣かしましたか、泣いてぢや解らん。お話し下さい、僕が支那から戻

つたからには、復……」

「はい、お話し致しますが、幸彦は、御存じの研究を致して居りました處、金貸しの爲めに、苦心の研究機械を差し押へてしまひ、それに母様の御死れになつたのやらで、氣の小さい男だものですから、神經衰弱の強度の爲め、精神に異状を呈しましたので、妾は、意地から藝妓に成り。幸彦を稻毛へ轉地させましたので、今では體も治り、又研究を始めまして居ります。で妾は、それを助けやうと存じますと、あらゆる誘惑の手が延まして、稼業が藝妓だものですから、今のやうな事も……」

「仔細話も聞き度いが、うむ、爾うでしたか、それは實にお氣の毒だ。まあ兎に角貴女は家へ歸るとして、僕は、一應幸彦君に逢ふ事にしよう……」

「はい、幸彦も、貴方に會ましたら、甚麼に力がつくてせう。妾も貴方のお出でになつたので、嬉しう御座います、」

「む、否、力になられる男ぢや無いが、お、何時か歩き出したと見え、此處は



ビール會社の前だ。もう吾妻橋渡れば、柳橋も直ぐぢや……」  
 吾妻橋の彼方、不夜城とも云ふ淺草公園の燈が、空を赤く色どつて、大川の流れに其餘りを映えさせ、鷗のちよと波を蹴つて月に啼く。

同 三 手切れ金

干潮の、數丁ばかり黒砂干潟を現した上を、漁村の女房娘などが、半農漁の手傳けもと、蛤淺蜆などの種子を發掘て居るのを眺めた。小高い丘の松林に、洋傘の濃青が、日の光線に映えて、月見草の咲き亂れた中に、腰を下ろした影が、二人洋傘に隠れて見える。

「お前とならば何處までも、淺間山、淺間の山の煙りでも、どつこいとやせぬ、ほい／＼と來た。」

傘洋に隠れた二人を、諷批るやうに俗歌を唄つて、態と近寄り。嘲笑ひを高くした漁夫の三人ばかり、後振りかへり／＼り濱へ去く。

「まあ、ほい／＼ほ、失禮ですわね、貴方、お氣に障つたてせう。妾の様な女と一緒に……」

颯と、洋傘を後へ廻して、莞爾笑ながら、幸彦を仰いだ辰子は、蹲踞だ前の月見草の花を折つては、投げ捨て、居る。

「はッはッ、羨やましがつて居るな、兎角田舎と云ふ處は、男女と連れだつのが眼に立つてね、妬むと云ふよりは、興味的を交へて、羨望の聲を出すひですな、はッはッ、莫迦な奴だ。否、質朴過ぎますな、」

辰子と同じやうに、月見草の花をむしつて、束ねながら、近視眼鏡をかけた眼を海へ向てまぶし氣に眉を寄せる。

「失禮ですが、目下御研究遊ばして在つしやる、彼の機械ですわね、何日頃出作る



ので御座います、」

「彼機ですか、左様、生涯の事業でせうな、」

「えッ、生涯の、まあ御冗談……を、お戯ひ遊ばさず、何日出作るのです、貴方……」

「ですからさ、生涯の事業……否、出作りに終るかも知れません。無智無能無學の三拍子揃つて居る僕ですもの、はッはッ、無理な事業を望みましたよ、」

「けれど、自己を確信して在つしやれば御成功遊ばすのは……、失禮ですが、御腕にお依りてせう、」

「はッはッ、其腕が危ないですよ、」

「あら、御謙遜遊ばして、けれど、お美やましいわ、」

「何が、羨やましいのです、」

「何がつて、お美しい奥様が、御忠實にお盡しなされるし、妾、それがお美やましい

のですわ、」

「はッはッ、美しい……、妻が夫に盡すのに、何が羨やましいです。爾んな事を云ふちや不可、所謂妬みとても思はれて、貴女の人格を傷つけますぞ、」

「申し譯が有りません。那麽つもりで申し上げたのでは御座いませんが、お氣に障りましたら……」

「否、氣になんぞ、はッはッ、障るものですか、併し、妻は能く盡してくれませす。

妻のお蔭で、意氣地の無いやうですが、愉快に、研究が出来るのですよ。」

「お樂みですわね、妾のやうな、爵位に自由をとらはれた、家庭に育つたものは、自分ながら哀れな情を顧みられますわ、否、眞實で御座います。妾が、男て在つた

なら、肩書の中から、廣い〜天地へ……」

「僕は、御婦人から、其様御言葉を聞くのは厭です、」

「……」



「女は、らしくと云つて、女らしい、優かな、總てに慎み深いのを好みます。爵位を顧りみたなら、尙更らです。新らしい、気分……、壓へられて居た。女てふものを脱さうとして、自由意識を喜ぶ、がつたと云ふ婦人は大嫌ひです。僕は、日本古來の風習を慕ひ、其の女らしいのを迎へます。自惚ちや有りませんが、妻は、相當の學問も、教育も受けましたが、僕の意の存する處を知つて、能く盡してくれず假令今は、賤業藝妓をして居りますが、僕は彼女を信じて居ますから、美しい心の女だと、蔭ながら、感謝して居ます。」

「……………」

「之れは、飛んだ事を言ひましたな、」

「否……、妾が……、至ら無いから……」

俯瞰いた眼から、ほろ／＼と涙が滾れて、折れ曲つた月見草の花の上へ落ちる。言ひ過ぎたと思つた幸彦は、氣の毒氣に見ながらも、女と云ふものに對する、或る

誇を浮べて、ひとり微笑むで居た。

此松山をさして、下から登つて來た。紺セルの洋服を着て、ルウズ高襟へ結むだ。襟飾が、綠色へ紅をぬ、ひとつた華美な模様を、ピンで止め、藁稗帽子を斜に冠つた顔色の白い、二十七八歳の男が、人を探すらしい、赤革の靴を泥にして居る。

「やあ、其處に在つしやるのは、令嬢の辰子様ぢや有りませんか、僕ですよ。高井義雄です、」

「あや、あッ、高井様でしたか、怎麼して此處へ……」

厭な顔した辰子より、怪嫌氣に眺めた高井が、幸彦の斜向る顔を覗かうとして、洋杖をつき直し、體の位置を替へて、二人の間へ入る。

「お見受した事の無い方だが、令嬢誰人です、」

己れの戀を、とられたかのやうに思つた、彼の高井義雄は、憤妬した睨みを幸彦に浴せて、辰子に聞き調さうとする。